

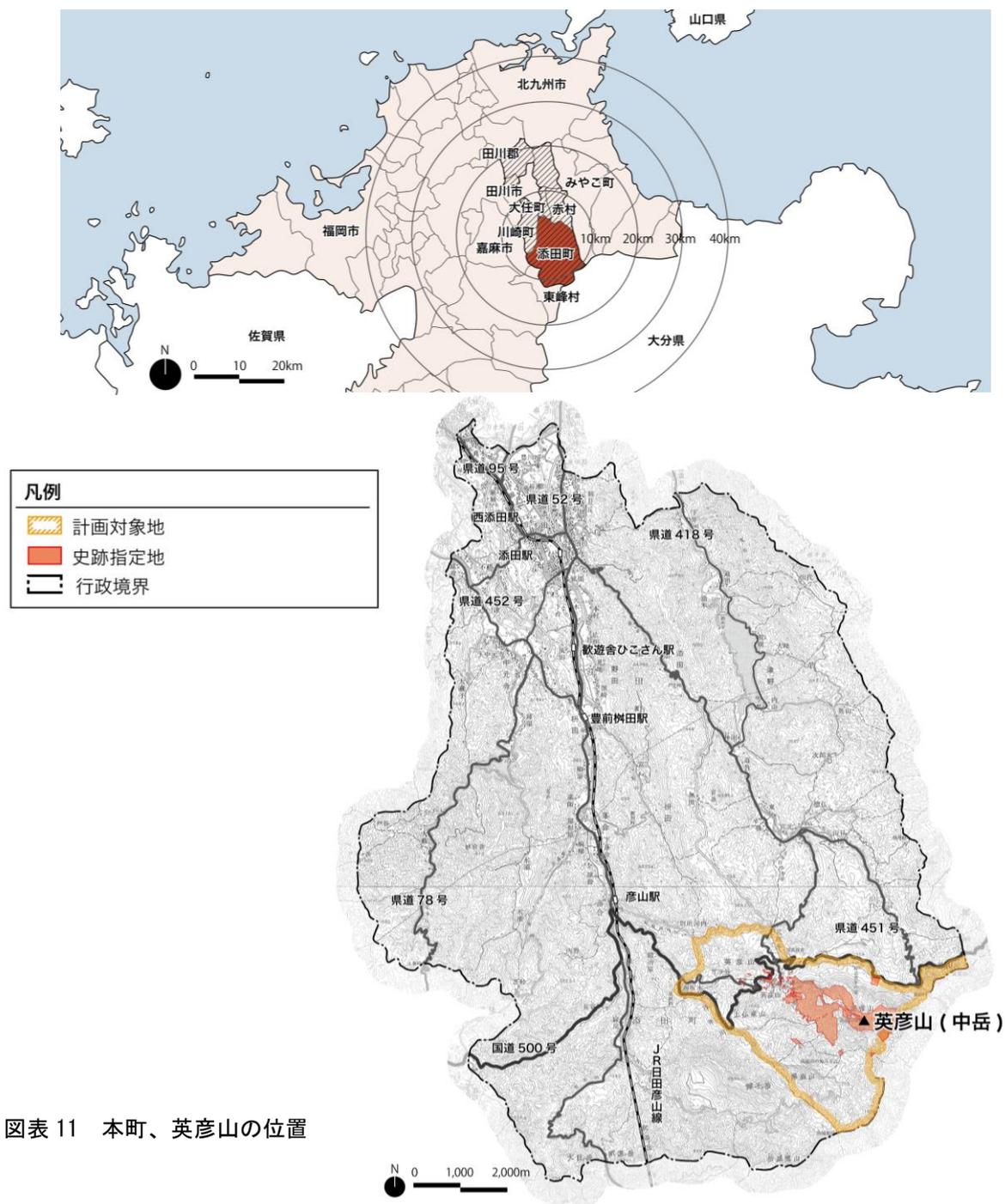
## 第2章 添田町及び英彦山の概要

### 2-1 添田町の概要

#### (1) 位置と面積

英彦山が所在する本町は、北緯 33 度 26 分～33 度 35 分の間、東経 130 度 49 分～130 度 57 分  
の間に位置し、福岡県の東南端、福岡市及び北九州市から約 40km の距離にある。東西 13km、  
南北 16km、面積 132. 20k m<sup>2</sup>を有し、県下有数の広大な面積を有している。

本計画の計画対象地は、大字英彦山と概ね合致している。大字英彦山は、町の南側に所在し、  
大分県と接する。その範囲は、『文久二年英彦山社地落合村境論絵図』に示され、東西 4km、南  
北 3km 四方、総面積 1, 177. 2ha である。



図表 11 本町、英彦山の位置

## (2) 自然環境

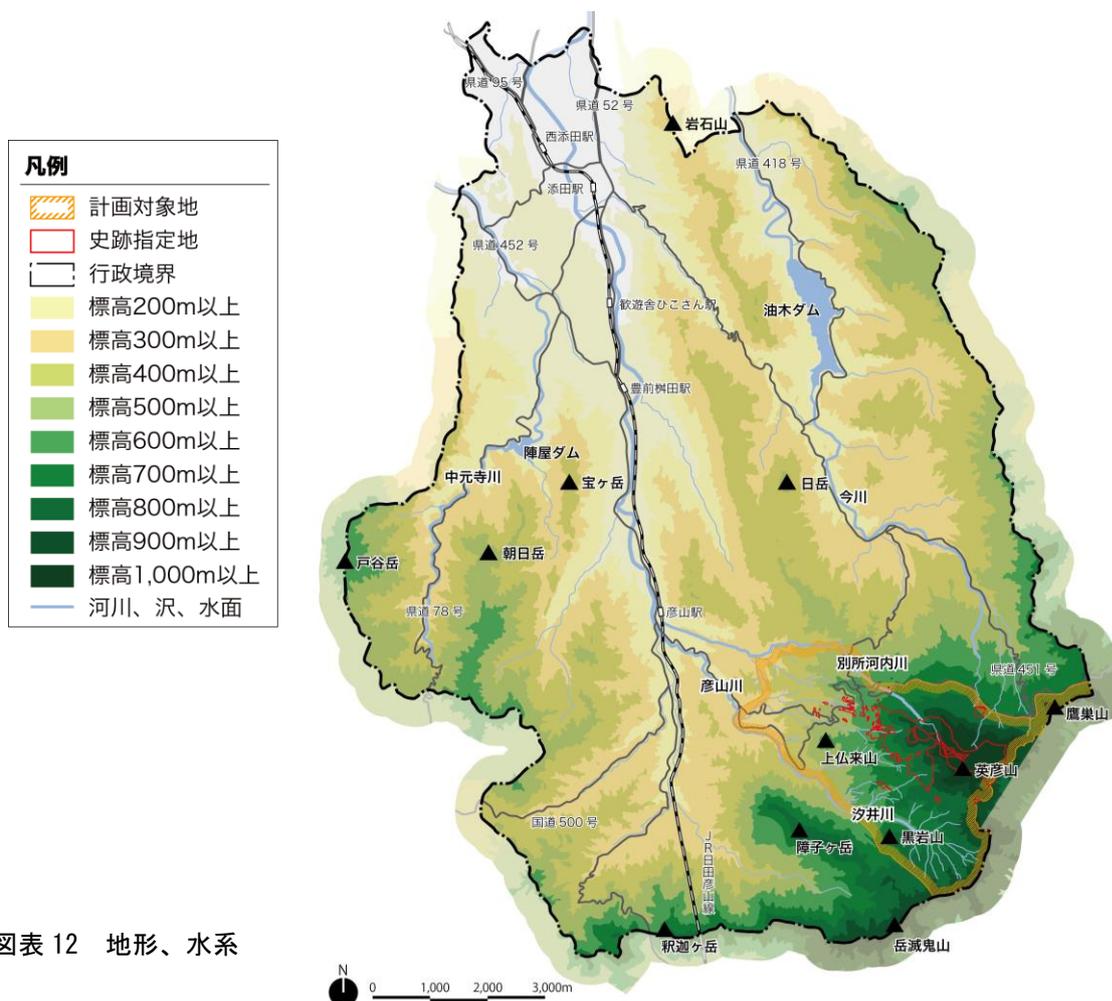
### 1) 地形・水系

地形は、標高約 1200m を有する英彦山を主峰として、東方に鷹巣山、一ノ岳、犬ヶ岳（豊前市）、経読岳（中津市）、西方に岳滅鬼山、釈迦ヶ岳などの山並が高原状に連なっている。これに直交するように幾つかのまとまった高地や丘陵地が存在し、それらの北側に位置する添田駅周辺に平地が広がっている。

英彦山は、福岡県の東部、大分県の北部にあって両県の境をなす、北部九州最高峰の高山である。英彦山神宮（上宮）のある中岳（1188.2m）を中心に北岳（1192m）と南岳（1199.5m）の三峰に分かれている。北部の眼下に筑豊の山野が広がり、南部の方角には遠く久住・阿蘇を眺望することができる。

英彦山の北部に位置する岩石山（454m）は、ところどころに巨岩が露出する地形険しい山である。山頂から北西部に位置する田川盆地を望むことができる山として、戦国時代から戦略上の要地として重要視されてきた。

本町を流れる主要河川は、英彦山に端を発する本町の中央を流れる彦山川、東側の津野谷を流れる今川、本町の西南端の町境を源流とし、西側の中元寺谷を流れる中元寺川がある。今川は瀬戸内海南西端に広がる海域の周防灘へ、彦山川と中元寺川は下流域で合流して遠賀川となり関門海峡の北西に広がる海域の響灘へ注いでいる。彦山川は、別所河内川、汐井川の2つの川が合流した河川である。英彦山内ではその他、谷筋沿いに流れる沢がいくつも見られる。



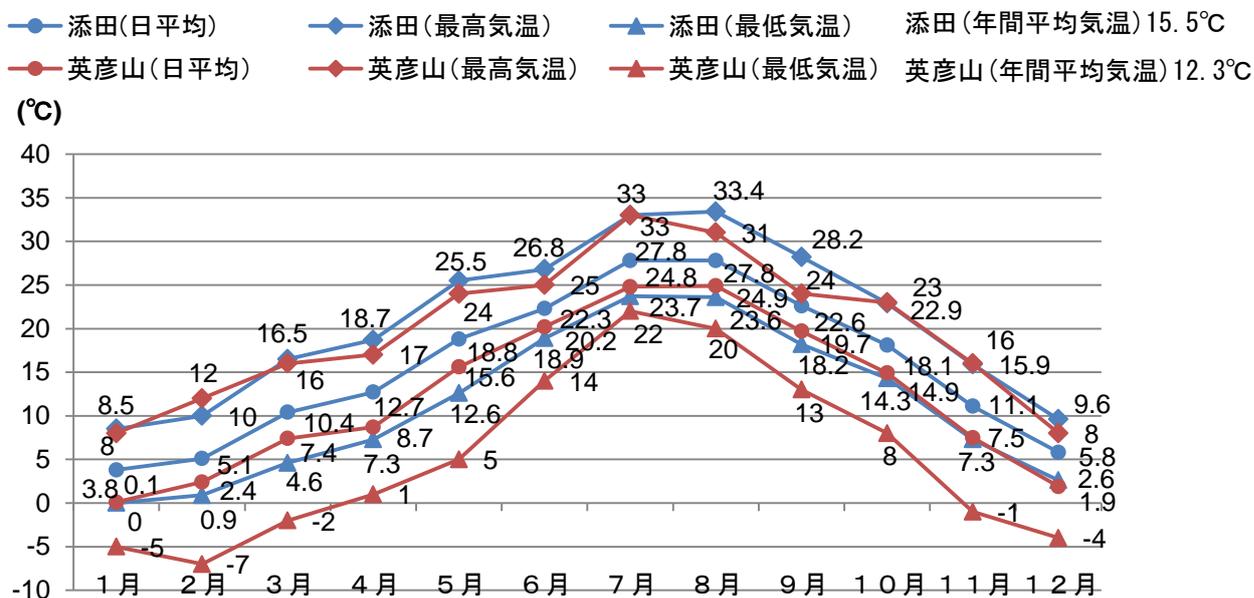
参考文献) 添田町教育委員会『英彦山総合調査報告書』（平成 28（2016）年）

## 2) 気候

本町は、平野部の添田駅周辺から山間部の英彦山の山頂まで1100m以上の標高差があるため、平野部と山間部で気象条件が大きく異なる。

平野部（添田）の気温は、年間平均気温15.5℃であり、7月から8月の夏期は最高気温が約33℃まで上がる。12月から3月までの冬期は最低気温が氷点下まで下がり、積雪を記録することもある。一方、山間部（英彦山）の気温は、年間平均気温12.3℃と平野部よりも低く、冬期は多量の積雪に見舞われる。

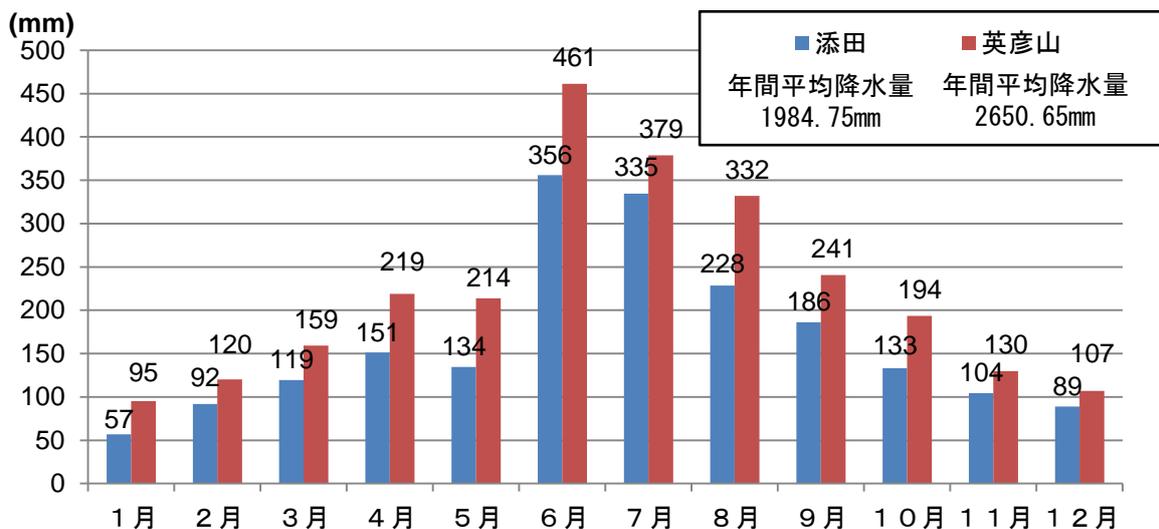
年間降水量は、平野部（添田）では1984.75mmに対し、山間部（英彦山）では2650.65mmと多くなっており、一年を通じて6月から7月の降水量が多い。



\* グラフ中の数値は、平成29(2017)年のデータ

図表13 月別の気温変化

【出典：添田／気象庁HP、英彦山／町資料】



\* グラフ中の数値は、過去10年間(平成20(2008)年～平成29(2017)年)の平均値

図表14 月別の降水量

【出典：気象庁HP】

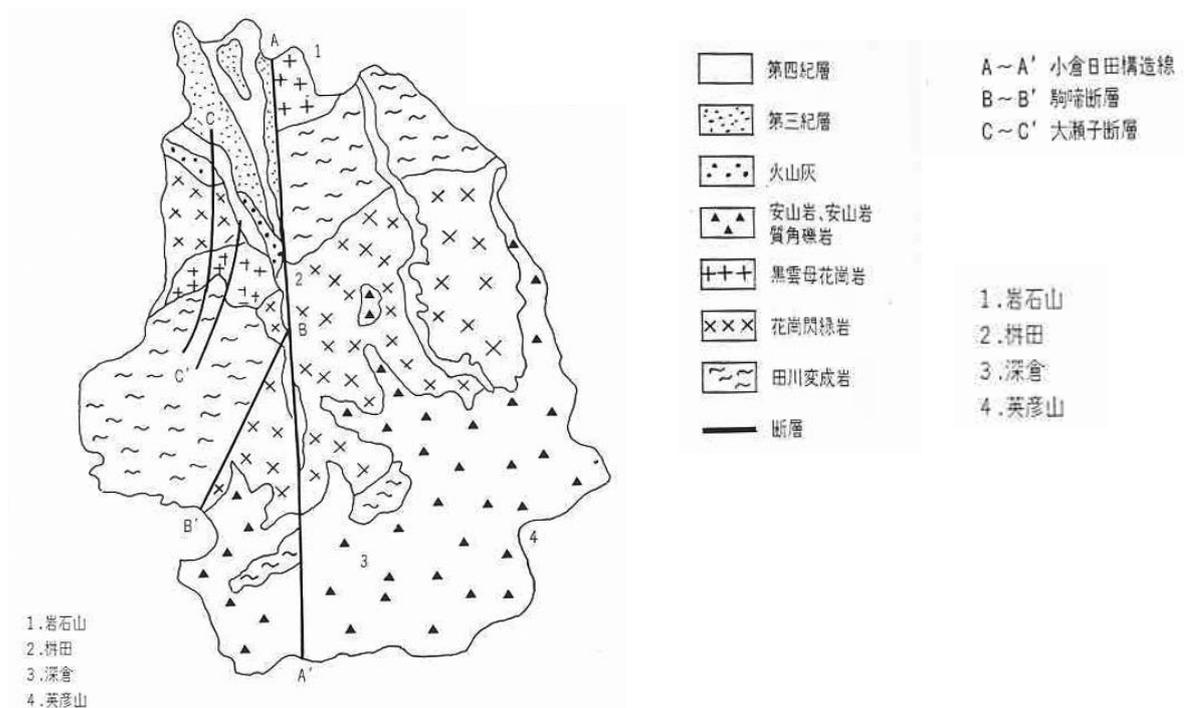
### 3) 地質

本町の地質は、大別すると南部から北部に向けてほぼ帯状に安山岩、安山岩質角礫岩、花崗閃緑岩、田川変成岩、黒雲母花崗岩となっている。

時代を見ると、田川変成岩は最も古くて古生代（約 5 億 4200 万 - 約 2 億 5100 万年前）、花崗閃緑岩は中生代（約 2 億 5217 万 - 約 6600 万年前）の初期、黒雲母花崗岩は中生代末期である。

英彦山は、新第三紀のおもに鮮新世（約 500 万 - 約 170 万年前）から第四紀更新世（約 200 万年前）のはじめにかけての火山活動によって成立したもので、火山活動は、英彦山の主峰群とその北東側にある鷹巣山で始まり、鷹巣山溶岩で終了した。また、一度休止した火山活動は再開し、英彦山主峰群から、東側の犬ヶ岳、西側の岳滅鬼山や釈迦ヶ岳へと拡大した。この活動は膨大な量の複輝石安山岩の火砕流類を噴出することに始まり、同質の溶岩流である英彦山溶岩、岳滅鬼山溶岩、障子ヶ岳溶岩などを形成して終了したとされている。

現在見られる山体は、山体の配列状態や断層、岩脈などから、東北東 - 西南西に雁行状に配列した多くの東西性の裂け目群が噴出口となり形成されたと考えられている。また、凝灰角礫岩、山国累層、北坂本累層などの火山性の岩石や地層の分布、望雲台や玉屋神社、深倉峡などの大規模な岩場の状況から、かつての英彦山の山々は、現在よりも少なくとも数百メートル高いことが推測されている。現在見られる深い溪谷や巨石、岩窟は、長年をかけて削られた山が低くなり、生まれたものと考えられている。



図表 15 地質図

【出典：添田町町史】

#### 4) 植生

本町の植生は、標高 800m を境に大きく 2 つの植生帯が見られる。

標高約 800m 以下の山麓部は、スギやヒノキ、スジダイをはじめ、暖温帯（暖帯）気候で見られるコジイ、アラカシ、ウラジロガシ、ヤブツバキ、アオキなどの照葉樹（常緑広葉樹）と、ヤマザクラ、ケヤキ、エノキ、イロハモミジなどの夏緑樹（落葉広葉樹）との混交林である。

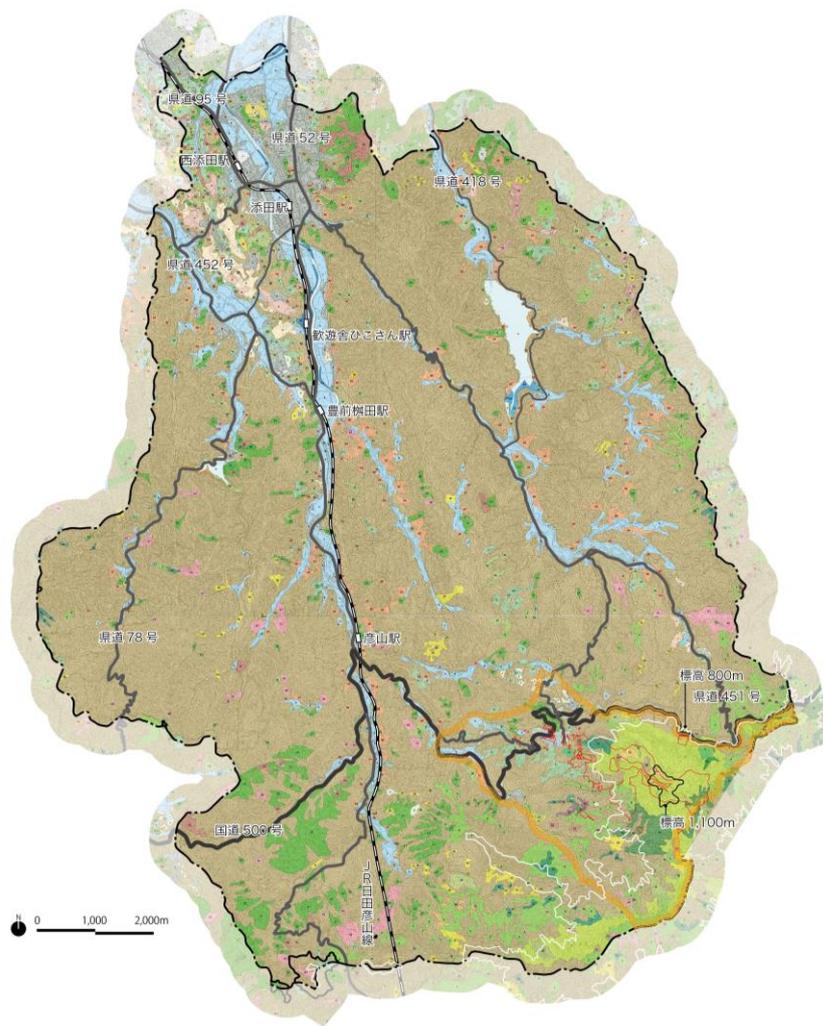
800m 以上の地域は、冷温帯（温帯）気候の影響を受け、ブナやミズナラ等の夏緑樹林となる。

英彦山の魅力は、夏緑樹林帯にあるブナ林、ミズナラ林、シオジ林、天然ヒノキ林、岩角地植物群落、ツクシシャクナゲ群落などの変化に富む植物群落にある。

英彦山内の高等植物は、英彦山を基準標本産地とするヒコサンヒメシヤラがある。高等植物のうち「英彦山」の名をもつ唯一の植物である。

また、県内では英彦山だけに限られるオオヤマレンゲが生育する。その他、ツクシシャクナゲやミヤマクマワラビ、フジシダ、イワオモダカなどの生育も確認されている。

なお、英彦山は平成 3(1991)年の台風の来襲により、表参道沿いの「千本杉」が全滅したのをはじめ、ブナ林、岩上の天然ヒノキ林、岩角地植物群落などに壊滅的な被害を受け、植生が大きく変化した。



凡例					
1. シラキ・フナ群落	19. イロハモミジ・ケヤキ群落	38. アカハシ・ウラジロガシ群落	58. クスノキ 植林	a. 畑雑草群落	w. 開放水域
2. ヨウブ・ミスナラ群落	20. ムクノキ・エノキ群落	39. ネササラスキ群落	59. その他植林	b. 水田雑草群落	i. 緑の多い住宅地
3. ミヤマクマワラビ・シオジ群落	23. ヤナギ・低木群落	40. ナカヤサスキ群落	60. 竹林	d. 放棄水田雑草群落	c. 放棄畑雑草群落
5. フナ・ミスナラ群落	27. シイ・カシ二次林	43. 伐採跡地群落	64. ハゼノキ・ケヤキ群落	e. 果樹園	f. 路傍・空地雑草群落
6. アシタバ・イヌシデ群落	28. アカシ二次林	44. ヨシガサ	65. アザミ群落	g. 牧草地	r. 自然裸地
10. ミヤマシキミアカシ群落	31. コナラ群落	45. シソノハ・ヨシ群落	70. ハイノキ・ツグ群落	h. コルブ場・芝地	
13. サカキ・コジイ群落	33. アカマツ群落	46. ツルヨシ群落	78. コサギ・アザミ群落	k. 市街地	
14. ヤブコウジ・スタンジ群落	34. ヌナヒシハ・ウツギ・アザミ群落 (自然林)	48. ヤナギ・タデ群落	91. ヒノキ群落	l. 工場地帯	
15. ミズハイ・イヌダジイ群落	36. タケ群落	49. ヒルムシロクサ	92. スギ・巨木林	m. 造成地	
18. クスノキ巨木林	37. クス群落	55. スギ・ヒノキ・サワラ植林	93. ササ群落		
					計画対象地
					史跡指定地
					行政境界

図表 16 植生分布図

参考文献) 添田町教育委員会『英彦山総合調査報告書』(平成 28 (2016) 年)

## 5) 動物

多くの植物が自生する英彦山には、これら植生に依存して、哺乳類や鳥類、爬虫類、両生類、昆虫等の極めて多くの動物が棲息している。ここでは、英彦山に棲息する特徴的な動物について記す。

大形の哺乳類は、シカが目立っており、英彦山周辺に昔から多く棲んでいた。昭和 30 (1955) 年頃は非常に少なくなっていたが、現在その数は増えている。その他、イノシシやタヌキ、キツネなどがある。イノシシは英彦山に明治末期頃まで棲息し、その後、一時姿を消したが、昭和 41 (1966) 年には上来仏山やその一帯で確認された。英彦山はもとより周辺の山域にも拡大し、農作物への被害が続出している。

鳥類は、英彦山神宮宮司であった高千穂宣麿男爵の『英彦山の動物』(明治 23 (1890) 年) の中に 51 種があげられている。その後、地元の自然観察グループ「みみずくの会」の後藤文嗣氏の平成元 (1989) 年の報告によると 93 種となっており、その数は豊かになっている。これらの種の中で、ブッポウソウは昭和 32 (1957) 年に福岡県の天然記念物に指定された。

爬虫類は、タカチホヘビやマムシがいる。タカチホヘビは中国で発見され、国内でも九州から青森県まで広く棲息している。明治 28 (1895) 年、高千穂宣麿男爵は、国内でははじめて英彦山にて発見したため、名称は氏の名をとって命名されたものである。体長は 20~40 cm、背面は黄褐色ないし黒褐色で、正中線は黒色、腹面は淡黄色である。動作は緩慢で、おとなしいヘビである。

両生類は、ブチサンショウウオ、シュレーゲルアオガエル、カジカガエルなどがある。ブチサンショウウオは、体長 10cm の小さい生物であり、幼生は鬼杉、豊前坊その他の溪流の底や水辺の石の下に見られる。

昆虫類は、高千穂宣麿男爵により調査が開始され、これまでに、蝶類は 8 科 87 種、蛾類は 52 科 1,600 種が確認されており、英彦山において約 50 種の新種が発見されている。この数字を手がかりにして、既に昆虫相が解明されている他の地方と対比させた英彦山の総種類数は、6,000 種を大幅に上回るものと推定される。



図表 17 ブッポウソウ



図表 18 タカチホヘビ

【図表 15 及び図表 16 の出典 : Wikipedia】

## (2) 歴史環境

### 1) 添田町の歴史

#### ア 原始

##### ① 縄文時代

英彦山は、本町の南部を流れる筑後川や山国川、北部を流れる遠賀川や今川など、北部九州の大型河川の源流をなす水分<sup>みくまり</sup>の山である。英彦山から流れる河川沿いには、縄文時代から人々の営みがあった。

英彦山麓の津野地区、榊田地区の扇状地は、多くの縄文時代の遺跡が存在し、下井遺跡では縄文時代早期のイノシシ捕獲のための落とし穴遺構が発見されている。

縄文時代後期には、後遺跡や榊田遺跡などにおいて、住居跡が発見されている。その中でも、後遺跡の土壙墓から出土したヒスイ製大珠は、遠く1000 kmも離れた新潟県糸魚川からもたらされたもので、当時の人々の交易圏の広さを示すものである。



図表 19 後遺跡の土壙墓



図表 20 後遺跡のヒスイ製大珠

##### ② 弥生時代

弥生時代の主な遺跡は、庄地区丘陵部に初期青銅器生産遺跡である庄原遺跡(県指定史跡)が存在する。庄原遺跡からは、金属溶解炉跡や工房跡などとともに銅 鉞<sup>やりがんな</sup> 鉞鑄型(国内最古級)が出土している。銅鉞は古代中国の楚(B.C. 230 頃)の領域で多く発見されており、朝鮮半島で12例、日本では、有明海沿岸を中心に10例しか見つかっていない。その鑄型が見つかったことは、この庄原遺跡が早くから大陸と文化、技術交流をもっていた遺跡の1つということができる。弥生時代の社会を知る重要な遺跡として注目されている。



図表 21 庄原遺跡の金属溶解炉跡



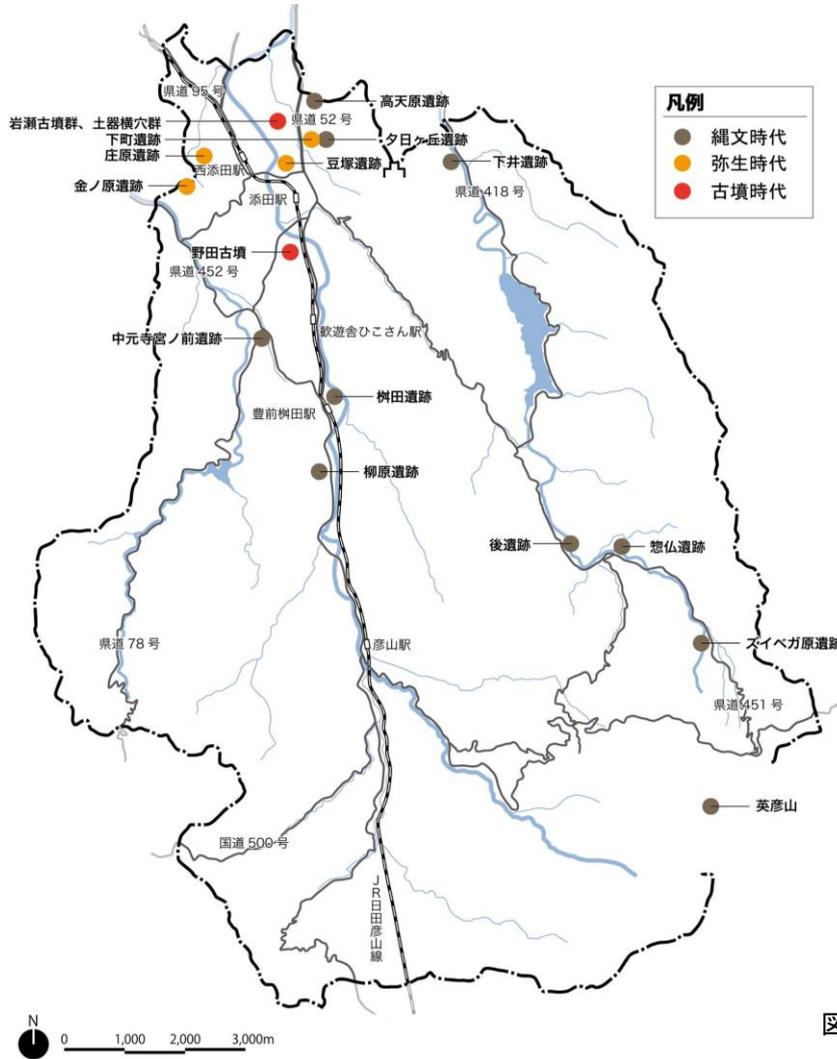
図表 22 庄原遺跡の銅鉞鉞鑄

### ③古墳時代

町内には、これまで9基の古墳と20基の横穴墓が発見されており、岩瀬古墳群や野田古墳の3基の古墳、土器横穴群が現存する。遠賀川の上流である内陸最深部に位置するこれら古墳群の存在は、大陸・朝鮮半島から進んだ農業生産技術の導入による稲作の普及が進んだことを示すとともに、それまでの小地域集団が統合され、小国家体制が整備されたことを示している。



図表 23 岩瀬 2 号古墳



図表 24 主要遺跡の分布

### イ 古代

#### ①奈良・平安時代

本町では、中元寺宮ノ前遺跡から奈良～平安時代にかけての郷庁跡とみられる遺跡が発見されている。中元寺宮ノ前遺跡では、官衙遺構でしか見られない墨書土器、中国製青磁、緑釉陶器などの遺物とともに、大型の建築物跡が発見されている。

古代末には、中元寺から川崎町安真木にかけては「虫生庄」と呼ばれていた。

『宇佐大鏡』に、「虫生稻光／田数六〇丁、同時定卅五丁」、「仲虫生別符本者府領也」と記されており、この地は大宰府領であったことが分かる。その後、永長2(1097)年、宇佐<sup>みろくじ</sup>弥勒寺に寄進されたと伝えられている。この虫生別符が後に中元寺荘となったと考えられている。

中元寺薬師堂には比叡山横川の恵心僧都が安置したという平安時代後期の薬師如来坐像(県指定文化財)があり、往時をしのぶことができる。また、『大宰府安楽寺草創日記』によると、永承2(1047)年に後冷泉天皇の御願によって安楽寺金堂が建立され、「副田庄七十町」などが寄進されたとある。これらは、現在の町域が各地の寺社荘園に組み込まれる程の重要な場所であったことを物語っている。



図表 25 中元寺薬師堂薬師如来坐像

## ウ 中世

### ①室町時代

室町時代初期の南北朝時代、田川地方は北朝方(幕府方)と南朝方(反幕府側)が勢力を競った。象徴的な例は副田荘であり、この地は鎌倉時代から地頭職を務めていた北朝方の島津氏と、南朝方によって地頭に任命された橘氏による二重に支配された。その後、室町幕府から派遣された九州探題の今川氏や渋川氏が九州の南朝勢力を一掃し、豊前国は幕府の一元支配が敷かれるようになった。九州探題の渋川氏を助け、九州の平定に一役買った周防の守護大名の大内氏は、北九州に進出したが、豊前国の領有権を巡って、肥前の少弐氏、豊後の大友氏と敵対し、激しく争った。

応仁の乱に端を発した戦国時代、豊前国を巡る争いは激化した。少弐氏を滅ぼした大内氏は、北九州の制圧を図り、豊前国に侵入してきた中国地方の戦国大名の毛利氏に倒された。毛利氏は、大友氏とも抗争を繰り返し、田川地方は約10年間戦場になった。

## エ 近世

### ①豊臣秀吉による九州平定

天正6(1578)年、北九州のほぼ全域を支配下に治めた豊後の大友宗麟は、対立する薩摩の戦国武将の島津義久と対決するため、日向に大軍を送った。しかし、その戦いで大友氏は島津氏に大敗を喫し、領土の大半を島津氏に奪われた。さらにこの敗戦で、それまで大友氏に威圧されていた九州の反大友勢力の武将たちは、島津氏と同盟を結んで一斉に反旗をひるがえしたため、大友氏は日向・肥後・筑後・豊前から攻撃を受けることになった。窮地に陥った大友宗麟は、九州を脱出し、完成したばかりの大坂城に赴いて、豊臣秀吉に救援を嘆願した。織田信長の意思を継いで天下統一を順調に進め、残すところは九州・関東・東北になっていた秀吉にとって、この嘆願はまさに渡りに船の申し出であった。九州遠征の口実ができた秀吉は、東北と山陰を除く37ヵ国に九州遠征の動員をかけ、兵25万人、米30万人分、馬糧2万頭分という大軍を編成し、天正15(1587)年、九州に向けて大坂城を出発した。

## ②豊前の堅城岩石城の攻防

秀吉が九州で最初の戦いの地に選んだのは、島津方の筑前の戦国武将・秋月氏の支配下にあった岩石城であった。岩石城が築かれた岩石山は、標高はわずか 454m であったが、その名の通り、急峻な花崗岩塊が露呈する天然の要塞で、豊前屈指の名城として知られていた。秀吉は、九州征伐の緒戦にこの岩石城をあえて選び、勝利することで九州での名声を高めようと考えた。



図表 26 廃城で放置された岩石城の矢穴石

秀吉の大軍は、秋月氏配下の武将である熊井久重が守る岩石城を攻撃した。秋月軍は、城に籠城して秀吉軍を迎え撃ったが、秀吉軍は城に火をかけることで一気に攻撃に転じ、難攻不落の岩石城は秀吉の大群の前にわずか一日で落城した。岩石城での秀吉軍の圧倒的な勝利は、後の戦況に大きな影響を与え、秋月種実は敗走して降伏、秋月氏と縁戚にあった英彦山も所領を没収された。また、秀吉最大の難敵、島津氏は秀吉との全面对決を避け、降伏したため、秀吉は岩石城攻め以上の激戦を経験することなく九州を平定した。

## ③毛利氏の支配

秀吉は、九州平定後、博多で諸大名の論功行賞を行った。博多の町は直轄地とし、九州の島津氏、大友氏、龍造寺氏の 3 大名の所領を安堵したのをはじめ、各武将に九州の所領を割り振る国分を行った。豊前小倉の所領を与えられたのは毛利勝信<sup>もうりかつのぶ</sup>であった。勝信は、長崎での貿易に積極的に関わるとともに、キリスト教にも関心を示し、宣教師を厚遇した。一方、彦山の所領と権威を支配下に置こうと、弟の毛利（森）久八郎吉勝の子息を彦山の座主にするように彦山に迫った。しかし、彦山座主は助有法親王からの血脈縁者を座主とすることを盾に、要求を拒絶した。

慶長 3（1598）年、秀吉の死後、重臣の徳川家康と石田三成が対立し、全国の大名たちは徳川方の東軍と石田方の西軍に分かれると、毛利氏は西軍についたが、関ヶ原の合戦の最中、居城の小倉城を黒田氏に攻め取られた。さらに、関ヶ原の合戦に勝利した徳川家康に領地を没収され、13 年間にわたった毛利氏の豊前国支配は終わりを告げた。

## ④細川氏と小笠原氏の藩政

毛利氏のあとに豊前国を治めたのは、関ヶ原の戦いの功勞で家康から恩賞を受けた細川忠興<sup>ほそかわただおき</sup>であった。豊前国と豊後国のうち、国東、速見両郡の計 30 万石を与えられた細川氏は、検地をおこなうときに、領民の戸口調査を行って人畜改帳を作成し、行政区画として 15~20 の村をひとつの「手永」とし、それぞれに大庄屋を長に置く「手永制」を敷いた。田川郡は、7 つの手永に区画された。元和元（1615）年、一国一城令により豊前国は、小倉城と中津城を除くすべての城が廃された。

寛永 9（1632）年、播磨国明石城主だった小笠原忠真は、細川氏の後任として小倉城に入城した。当時、九州は外様大名の勢力圏であったが、譜代大名の小笠原氏の小倉城入城は、徳川の全国支配の完成を象徴するできごとであった。小笠原氏は、細川氏の農村支配機構をそのま

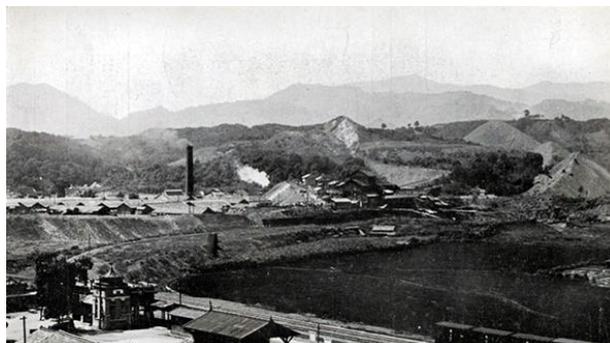
ま継承した。

## オ 近代

### ①石炭産業による繁栄

明治維新後、近代化に向けた殖産政策として官営八幡製鐵所が創業され、石炭需要が拡大し、筑豊各地は炭鉱が開業した。

藏内次郎作は、明治 18(1885)年、親戚の久良知重敏らとともに峰地炭坑の採掘を始めた。大正 4(1915)年、次郎作が力を注いだ小倉鉄道は、東小倉から上香春（現・香春駅）を經由して上添田（現・添田駅）まで開通した。翌 5（1916）年、次郎作は藏内鉱業株式会社を設立した。その後、峰地 3 坑等を開坑したが古河鉱業に譲渡することになり、軍需拡大に伴って、筑豊炭田は国内第 1 の産出量を誇った。



図表 27 峰地炭鉱 峰地 1 坑全景

英彦山は、旅館街を中心に炭鉱就業者の保養所として賑わい、添田本町地区は商業施設が拡充し、西側に小倉からの主貫道が併設され、西本町と称して賑わった。峰地炭鉱のあった上添田駅（現・添田駅）に商業施設の中心が移り、映画館、劇場などの娯楽施設も整備された。

しかし、エネルギー政策を迎え、昭和 36(1961)年の峰地 1 坑の閉山を機に衰退し、昭和 44(1969)年に完全閉山となった。

### ②炭鉱閉山後

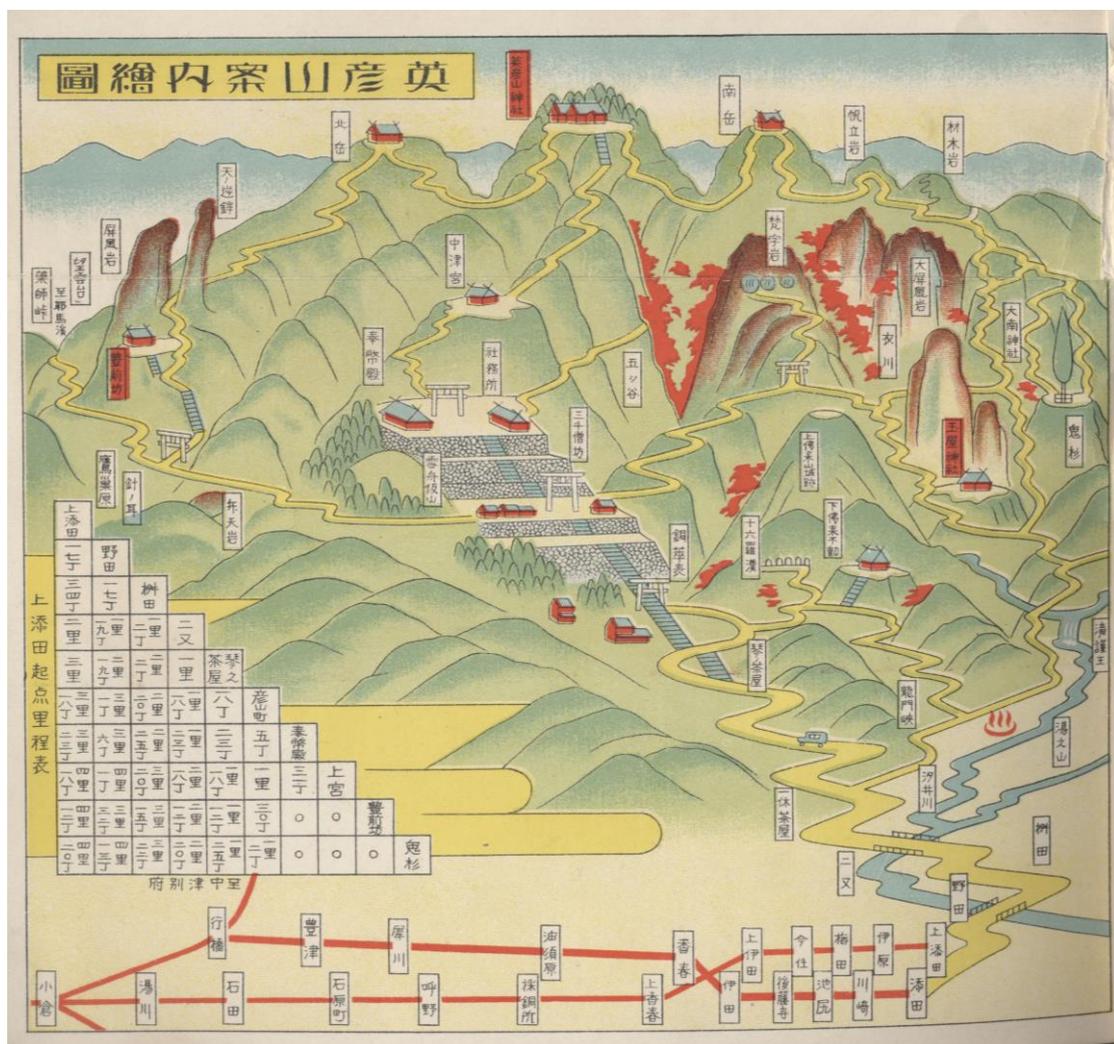
炭鉱閉山後、本町は人口流出や残存鉱山による地盤沈下等の問題が発生したため、鉱害復旧事業や新産業の振興が図られ、ボタ山や炭鉱住宅は全て取り壊された。炭鉱という主要産業を失った本町は、豊富な自然を生かした林業、水はけのよい中元寺金ノ原台地を生かした畑作農業などが地場産業の中心となった。

一方、深山幽谷の豊かな自然と悠久の歴史を育んできた英彦山は、文化活動の場ともなり、女流俳人として著名な杉田久女は、英彦山で度々吟行し、数多くの句を生み出した。久女の作品の「研して 山ほととぎす ほしいまゝ」は、英彦山を詠んだ歌として特に著名である。また、英彦山神社の宮司となった高千穂宣麿男爵は、タカチホヘビを発見するなど成果を上げ、自ら開設した「高千穂昆虫学実験所」を九州帝国大学に寄附し、昭和 11(1936)年に昆虫学研究所の雄となる「九州帝国大学生物学研究所」が置かれることとなった。そして昭和 25(1950)年、英彦山は「耶馬日田英彦山国定公園」として国内最初の国定公園に選定されると、昭和 40（1965）年に町営「国民宿舎ひこさん」、昭和 46（1971）年に県立「英彦山青年の家」が開所され、多くの観光客で賑わった。彦山駅まで開通していた鉄道は、現在の本町と東峰村を結ぶ釈迦岳トンネルが貫通したことにより、昭和 31（1956）年より日田彦山線（城野駅から夜明駅まで）が開通した。この開通により、観光地英彦山の登山口としての彦山駅の年間乗降客は、昭和 31（1956）年に年間 18 万人を越えた。

本町はこのような観光振興に力を入れる一方、治水・利水の観点から昭和 46 (1971) 年に「油木ダム」を、昭和 50 (1975) 年に「陣屋ダム」を完成させ、農林業や工業などの産業と住環境の改善を図っている。

平成以降も観光業に力を入れており、英彦山においては、平成 6 (1994) 年に「英彦山温泉しゃくなげ荘」の新設、平成 15 (2003) 年に「国民宿舎ひこさん」を「ひこさんホテル和」へと再建、平成 17 (2005) 年には「英彦山花園」の開園と合わせて「英彦山スロープカー」の運行が開始された。

平野部においては、平成 8 (1996) 年に町民等の相互交流の場として、ふれあいの館「そえだジョイ」、「岩石城 (美術館)」が竣工、平成 11 (1990) 年にふれあい物産センター「歓遊舎ひこさん」を開業し、町内外から本町産の野菜などを求めて、多くの人を訪れてきた。平成 17 (2005) 年に歓遊舎ひこさんが道の駅として開駅されると、平成 20 (2008) 年に JR 日田彦山線に「歓遊舎ひこさん駅」が開業された。



図表 28 英彦山案内絵図 (昭和 7 (1932) 年)

【出典：英彦山大観】

参考文献) 添田町史編纂委員会編『添田町史 上巻・下巻』(平成 4 (1992) 年)  
 添田町制施行 100 周年記念実行委員会編『添田町政施行 100 周年記念誌』(平成 23 (2011) 年)

## 2) 添田町の指定文化財

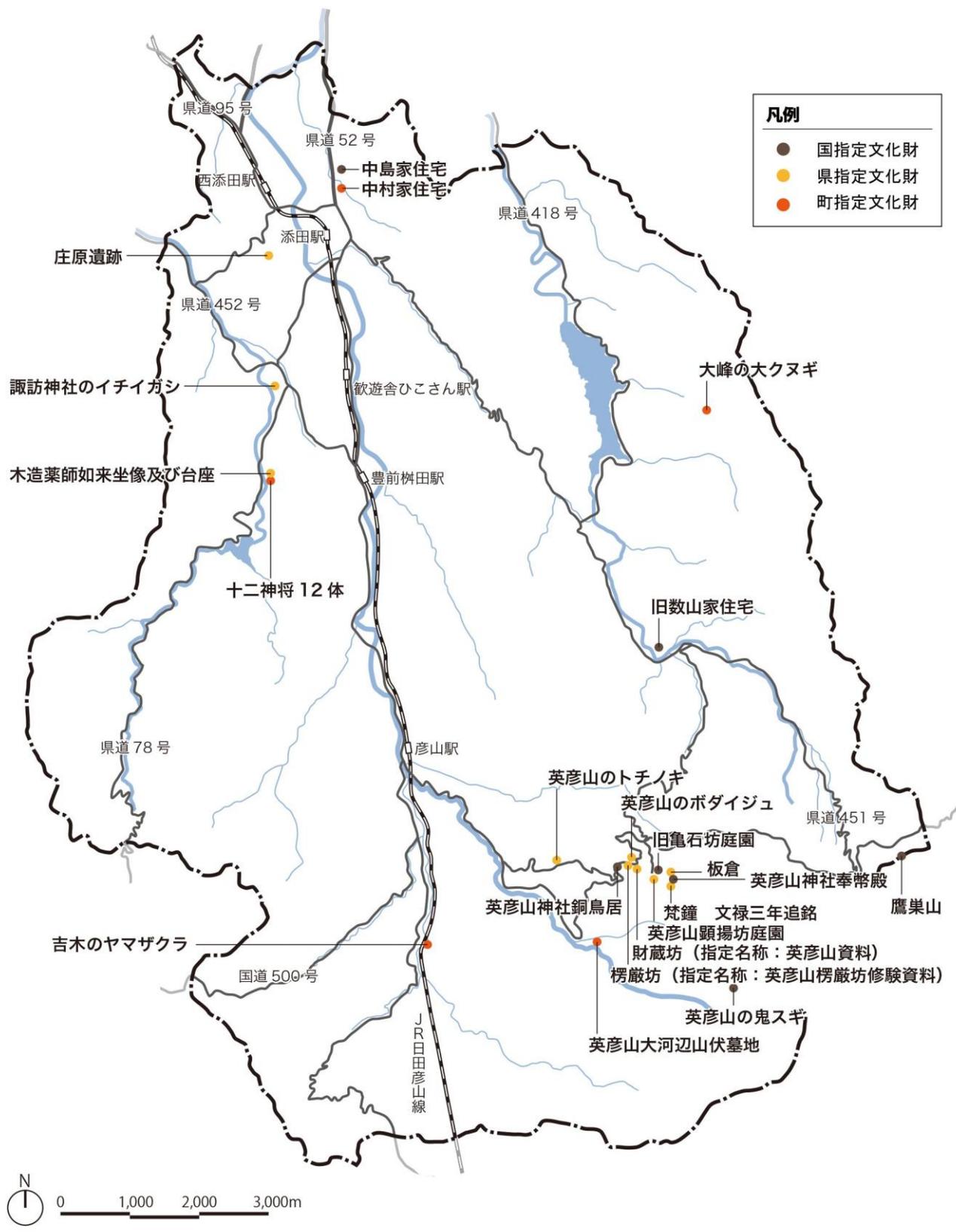
本町は、美術工芸品を含め様々な指定文化財を有しており、国指定文化財と福岡県指定文化財（以下、県指定文化財）、添田町指定文化財（以下、町指定文化財）を合計すると、32 件の指定文化財が存在する。

多くの指定文化財は、修験道に関するものであり、英彦山神社銅鳥居や奉幣殿等の社殿、山伏の宿坊等の有形文化財が英彦山内に分布している。英彦山の麓には、英彦山への往来により形成された日田道の町家建築や集落の農家住宅等の有形文化財（建造物）が分布している。

図表 29 指定文化財等の件数

類型		国指定	県指定	町指定	国登録	合計
有形文化財	絵画	－	－	－	－	－
	彫刻	－	1	1	－	2
	工芸品	2	1	－	－	3
	書跡・典籍	1	－	－	－	1
	古文書	－	－	－	－	－
	考古資料	1	－	－	－	1
	歴史資料	－	－	－	－	－
	建造物	4	1	1	－	6
無形文化財		－	－	－	－	－
民俗文化財	有形民俗文化財	－	4	－	－	4
	無形民俗文化財	1	－	1	－	2
記念物	史跡	1	1	1	－	3
	名勝	1	1	－	－	2
	天然記念物	2	4	2	－	8
文化的景観		－	－	－	－	－
伝統的建造物群		－	－	－	－	－
合計		13	13	6	－	32

（平成 31（2019）年 3 月 31 日現在）



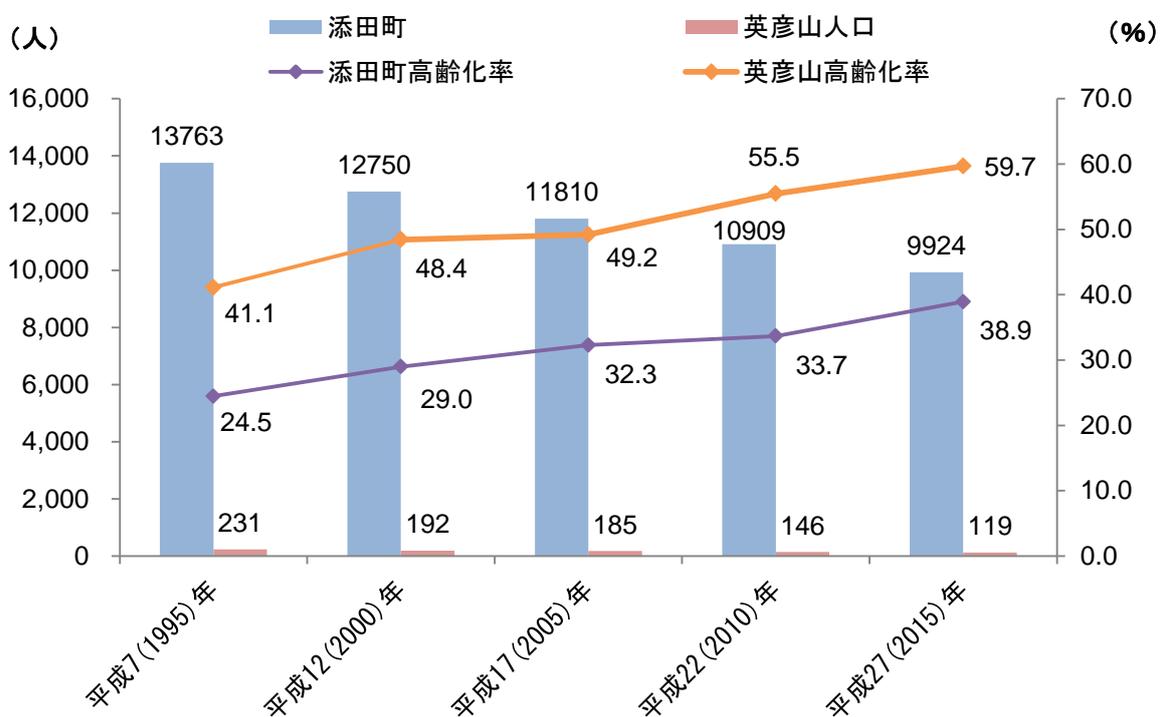
図表 30 指定文化財等の位置

### (3) 社会環境

#### 1) 人口

本町の人口は、平成 27（2015）年時点で 9,924 人、大字英彦山の人口は 119 名である。平成 7（1995）年以降、町全体において人口減少の状況にあり、大字英彦山の人口も減少傾向にある。

一方、高齢化率は、平成 7（1995）年以降、町全体において増加傾向にあり、平成 27（2015）年時点で 38.9%である。大字英彦山の高齢化率は同様に増加傾向にあり、平成 27（2015）年時点で 59.7%となっている。高齢化率の全国平均が 26.3%であることから、英彦山の高齢化は顕著に高い状況にある。



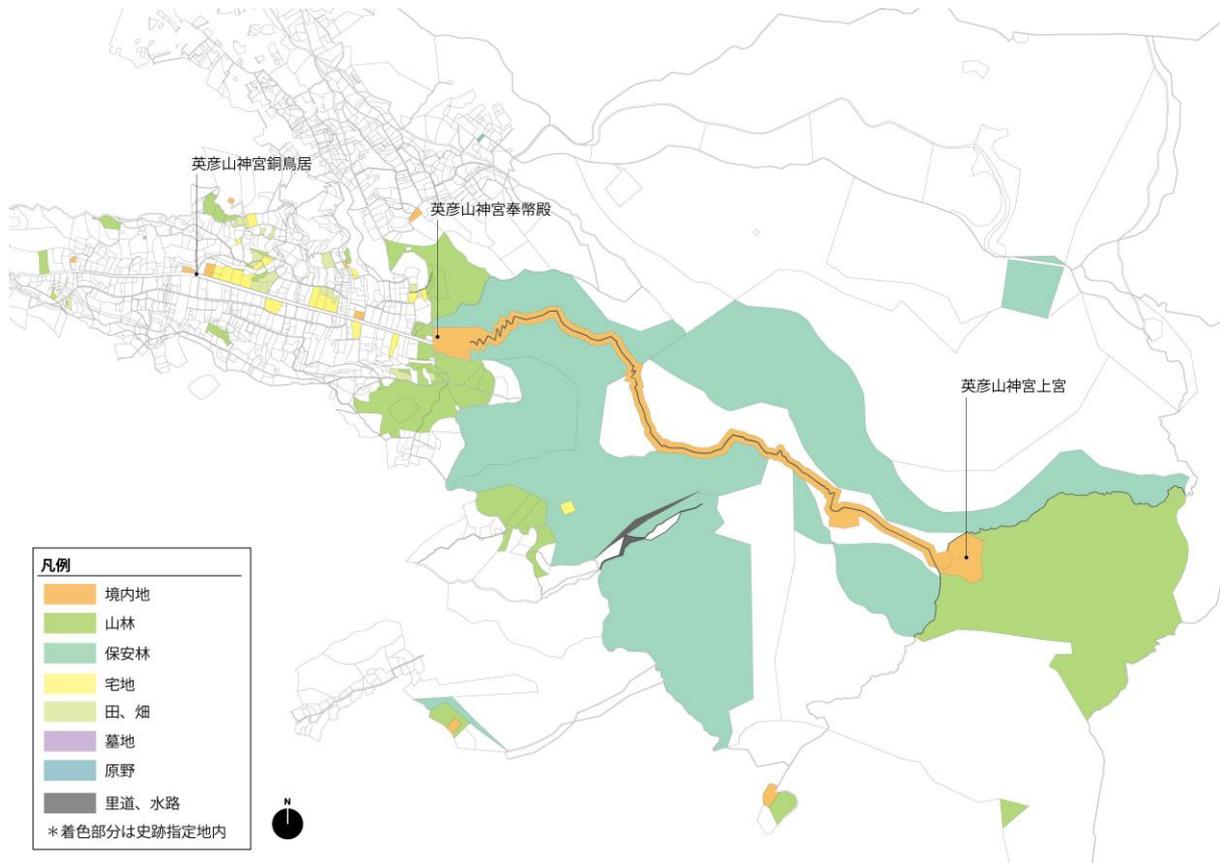
図表 31 本町と大字英彦山の人口、高齢化率の推移

【出典：国勢調査】

## 2) 土地利用

本町の土地は、約8割が森林となっており、非常に多くを占めている。農地は1割未満で、宅地等の土地利用は残りの1割強程度となっている。

史跡英彦山の大部分を占める英彦山神宮奉幣殿より山頂域は、英彦山神宮下宮、中宮、上宮とそれらを結ぶ参道が境内地として利用されている他は、大部分が山林及び保安林であり、自然地となっている。英彦山神宮奉幣殿より西側に位置する門前領域は、坊舎が建ち並ぶ宅地、田や畑、山林として利用されている。



図表 32 史跡指定地内の土地利用

【参考：地籍調査】

### 3) 交通

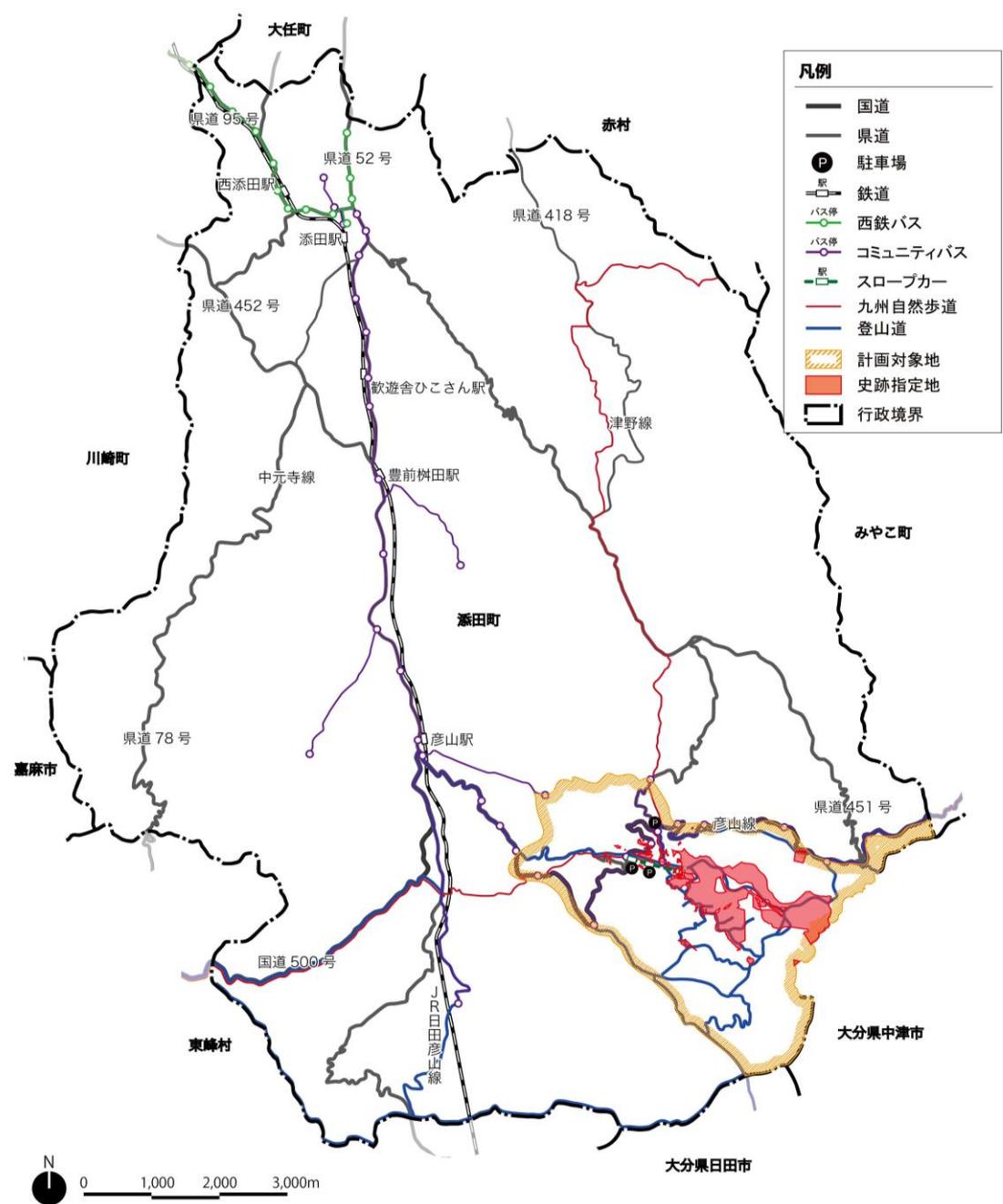
英彦山への交通アクセスは、主に自動車と公共交通がある。

自動車によるアクセスは、主に国道 500 号を通り、英彦山神宮奉幣殿付近まで通行できる。駐車場は、別所駐車場やスロープカーの駅周辺にまとまって整備されている。

公共交通によるアクセスは、最寄り駅の JR 日田彦山線の彦山駅より英彦山へはコミュニティバスが通る。しかし、平成 29 (2017) 年 7 月の九州北部豪雨の影響により、JR 日田彦山線は添田駅から夜明駅 (日田市) までが不通となっており、現在、マイクロバスや中型バス、ジャンボタクシーによる代替輸送が行なわれている。

英彦山内は、英彦山神宮の参道と並走して、英彦山神宮銅鳥居から英彦山神宮奉幣殿を結ぶスロープカーが整備されている。

また、英彦山をはじめとする山々には、九州自然歩道や登山道等が整備されている。



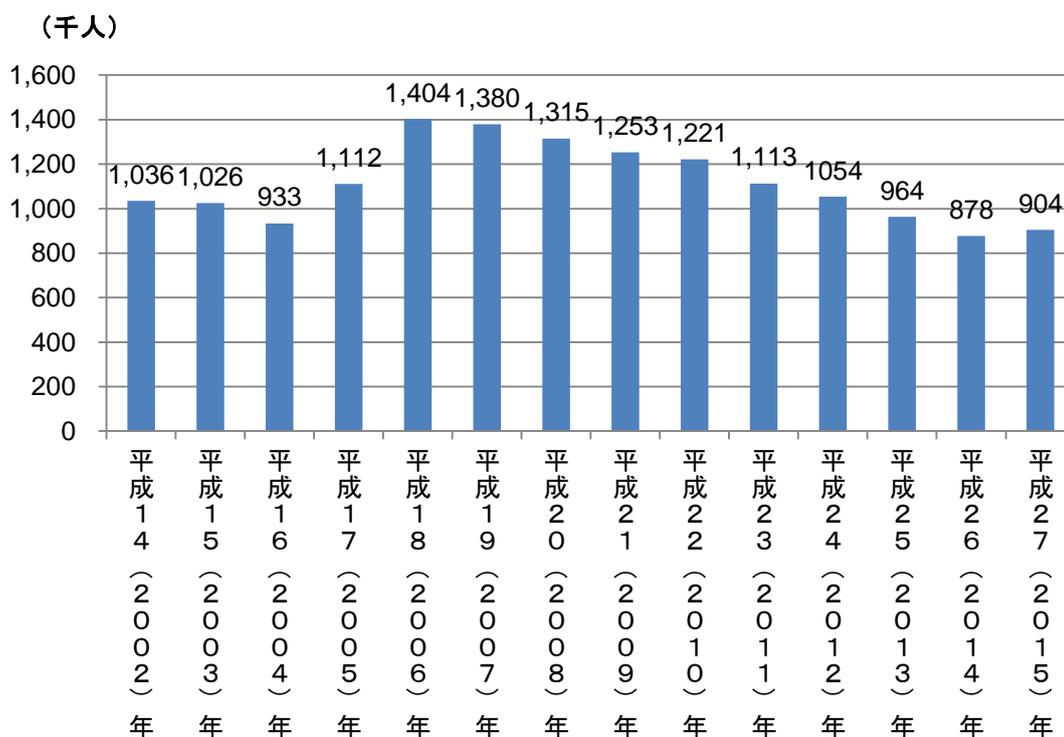
図表 33 英彦山の周辺交通網

#### 4) 観光

本町は、有数の観光資源である英彦山を擁するとともに、観光振興としてバーベキュー等のアウトドアが満喫できる「英彦山野営場」や、町の花であるシャクナゲ 5,000 本をはじめ 70 種類以上、3 万 2 千本以上の花木が咲き乱れる「英彦山花園」、桜の名所として名高い「添田公園」、英彦山修験道に関する重要文化財等が展示されている「英彦山修験道館」、ドライブオアシスと物産販売所を兼ね備えた「道の駅歓遊舎ひこさん」、観光客の宿泊施設である「英彦山温泉しゃくなげ荘」や「ホテル和」等の多種多様な施設が整備されている。また、花火大会やふるさとまつり等の四季折々のイベントを実施することで、年間 100 万人を越える人が訪れている。

観光入込客数は平成 14（2002）年から微減していたが、平成 17（2005）年のスロープカー開業等の取組により、平成 18（2006）年は年間約 30 万人増加した。しかし、平成 18（2006）年以降は観光入込客数が微減しており、英彦山信仰離れと近隣市町村の観光地整備等の影響が考えられる。

平成 27（2015）年に実施した調査によると、英彦山への来訪者は、多くの人が英彦山神宮奉幣殿、次いで上宮（中岳山頂）を訪れており、最もよかったと思った場所・施設においても、英彦山神宮奉幣殿、上宮（中岳山頂）を挙げている。また、英彦山の魅力は、景観・自然、次いで登山・トレッキングが多く挙げられている。



図表 34 観光入込客数の推移

【出典：福岡県観光入込客数推計調査】

## 2-2 英彦山の概要

## (1) 調査の概要と成果

## 1) 英彦山にまつわる調査概要

英彦山にまつわる調査は、行政主体による調査に加えて、民間等による調査も含め実施されている。調査の経緯は、下表のとおりである。

図表 35 調査の経緯 (1/2)

年	内容
昭和 19 (1944) 年	英彦山神社が小林健三に委嘱して『英彦山神社誌』を発行。
昭和 23~25 (1948~50) 年	伊藤尾四郎『福岡県史料業書』が発行。 ・「豊前彦山史料」と題して、一部英彦山文書や祭礼等を収録。
昭和 33 (1958) 年	田川郷土研究会『総合研究報告英彦山』が発行。 ・歴史民俗、文学、自然、建築、観光等の分野で調査研究された成果を論考として掲載。
昭和 47 (1972) 年	添田町教育委員会『英彦山民俗緊急調査』が発行。 ・英彦山の資料概要がまとめられた。
昭和 52 (1977) 年	中野幡能編『山岳宗教史研究叢書十三巻「英彦山と九州の修験道」』が発行。 ・英彦山を始め、地方山岳宗教研究の指標となる多くの九州山岳霊場の内容が掲載。
昭和 53 (1978) 年	添田町教育委員会『山伏の住む英彦山－英彦山伝統的建造物群保存地区調査概要』が発行。 ・英彦山の建造物、庭園の概要と保存に関する指針が示される。
	田川郷土研究会『増補英彦山』が発行。 ・『総合研究報告英彦山』に「彦山文学年表」、「英彦山綜合年表」等の研究論考を増補。
	北九州市立歴史博物館が昭和 51 (1976) 年に「豊前修験道英彦山展」を開催し、その研究成果を『研究紀要 1 特集豊前修験道』にまとめた。
	(財)元興寺文化財研究所が昭和 52 (1977) 年度に英彦山・求菩提山の仏教民俗調査を行い、『英彦山・求菩提山仏教民俗資料緊急調査報告書』を発行。
昭和 57 (1982) 年	朝日新聞社主催で「英彦山学術調査」を開始し、朝日新聞西部本社編『英彦山』が発行。 ・峯入道程踏査や山頂経塚遺構調査、窟所在調査などが行われた。
昭和 58 (1983) 年	朝日新聞西部本社編『英彦山発掘』が発行。
昭和 59 (1984) 年	北岳山頂から金銅製如来立像(新羅仏)、「王七房」銘経筒、今熊野磨崖仏などを検出。
昭和 61 (1986) 年	添田町教育委員会『英彦山修験道遺跡 添田町埋蔵文化財調査報告書』添田町役場編『英彦山を探る』が発行。
	廣渡正利と川添昭二の共同で『彦山編年史料古代・中世編』が発行。

図表 35 調査の経緯 (2/2)

年	内容
昭和 63 (1988) 年	長野覺『英彦山修験道の歴史的地理学的研究』が発行。 ・英彦山の聖域観、領域、信仰圏を明確にし、英彦山修験の特徴的な回峰行「大廻行」や峯入修行、英彦山修験組織のあり方などを示す。
平成 5 (1993) 年	英彦山研究会『英彦山玉屋坊跡をめぐる諸問題』を報告。 ・玉屋谷の坊跡、窟、墓地など英彦山の史跡要素を抽出した調査。
平成 6 (1994) 年	廣渡正利と福岡古文書を読む会の共著で『英彦山年番日記』、『英彦山信仰史の研究』が発行。
平成 8 (1996) 年	添田町教育委員会『英彦山大河辺山伏墓地調査報告書』が発行。 ・観光開発に伴い調査を実施。
平成 9 (1997) 年	『山岳修験』一九号の中で、山本義孝氏「英彦山四十九窟の信仰 玉屋窟を中心として」が報告。 ・窟構造や窟籠修行のあり方などを有機的に検証。
平成 18 (2006) 年	『山岳修験』三七号の中で、山本義孝氏「彦山中における宿遺跡の検討」が報告。 ・大宿、柴宿などの機能や宿形状が示される。
平成 19 (2007) 年	東峰村教育委員会『岩屋神社遺跡 東峰村埋蔵文化財調査報告書第一集』が発行。 ・宝珠山窟の性格を明確にするとともに、これまでの英彦山窟の成果を集成し、出土遺物から英彦山修行の時期を 8 世紀まで引き上げる可能性を示す。
平成 28 (2016) 年	添田町教育委員会が平成 22 (2010) 年から歴史的諸資料の総合調査を 5 ヶ年にわたって実施され、『英彦山総合調査報告書』が発行。
平成 29 (2017) 年	添田町教育委員会が英彦山内の庭園調査を開始。

参考文献) 添田町教育委員会『英彦山総合調査報告書』(平成 28 (2016) 年)

## 2) 総合調査の内容と成果

本町は、平成22(2010)年から英彦山の歴史的範囲と遺跡内容確認調査を5ヵ年にわたって実施した。また、歴史や民俗、古文書、考古、美術工芸、建造物の各分野からなる「英彦山調査指導委員会」を組織し、その指導により総合的に史跡たる英彦山の内容調査を実施して精査した。

### ①歴史的範囲の調査

古代の英彦山は、『彦山縁起』によると、神霊の天降る山として「日子神」(天忍穗耳命<sup>あめのおしほみのみこと</sup>)を祀り、山頂を「日子神」の御坐す神奈備<sup>かんなび</sup>「日子乃御山」として、独自の聖域を創出して神体山として確立した。

山頂域は、11～12世紀頃を中心として多くの経塚が山頂三峰に営まれ、法躰岳(北岳)山頂磐境では、「王七郎(房)」銘経筒、金銅製新羅仏<sup>しらぎ</sup>など渡来系仏教遺物が出土している。

また英彦山は、玉屋般若窟に代表される四十九窟を体系化し、山中行場として整備され、窟を中心とした谷講集落ができると、末山である蔵持山(みやこ町)、求菩提山(豊前市)などの英彦山六峰を包括して、七里四方に及ぶ広大な神領域が定められ、彦山領域として「七里結界」の概念が確立した。『彦山流記』によると、彦山領域は、東限は中津市山国大井手口、南限は日田市財津壁野、日田市大肥、西限は朝倉市杷木山、東峰村江川付近、嘉麻市宮吉八王子、北限は本町岩石山付近、みやこ町犀川蔵持山として、七里四至の領域位置が示されている。

このように中世における英彦山領域の規模は広大で、領域の変遷から最終的に保護すべき史跡「英彦山」の領域を把握することとした。

中世により確立した七里結界神領域は、戦国動乱により失われたが、江戸期に至って小倉藩主細川忠興をはじめ、諸大名を大檀那とし、多大な寄進を受けて再興した。

その信仰圏は、九州一円におよび「九州九国総鎮守」として大峰山、羽黒山と並ぶ三大修験霊場となり、山中に衆徒三千にも及ぶ大規模修験集落を出現させた。また、「坊家」は九州一円には42万戸もの檀家を有した。

元和2(1616)年に大講堂再建余材で造られたとされる立体地形模型「彦山小形」は、この隆盛を極めた近世彦山神領域の四至位置を示したものと考えられている。約1.33m四方に英彦山神領域を彫出されたものであり、本町ではこの詳細なレーザー実測調査を実施した。その結果から、四至位置は、東は野峠、西は小石原行者堂、南は宝珠山岩屋、北は日岳、と考えられ、概ね東西12.5km、南北13.0km程の範囲となることが判明した。これは、天保4(1833)年の『豊前国之郷村高帳』御勘定方差出控の英彦山神領域東西3里余、南北3里余の範囲に合致することが分かった。

江戸後期になると、英彦山領域の範囲は一変する。享保年中に著された『英彦山來歴直覧』には「東西2里、南北2里半」が示されており、範囲が縮小されていることがわかる。また、幕末に英彦山と小倉藩の軋轢が深まると、英彦山社地・落合村堺について論じた『文久二年英彦山社地堺落合村堺論図』においては、英彦山社領はさらに狭まり、南坂本下の祓川以西の神領域が欠落して祓川を落合境とすることが示されている。津野堺は、七大童子から野峠を結んだ稜線とし、領地縮小されたことがわかる。よって、この文久2(1862)年の絵図の範囲は、英彦山修験の最終的な歴史範囲として捉えられ、現在の行政区としての大字英彦山とほぼ合致

する。このことから、この範囲をもって史跡「英彦山」の保護すべき範囲として位置づけられた。

## ②航空レーザー測量調査と史跡構成

近世における英彦山の範囲と構成は、江戸中期までに完成したとみられるが、その構成は大きく2分されている。この構成は、英彦山霊仙寺（現、英彦山神宮）境内域を境として、上部の修行と聖域の空間と、下部の現在も生活域となっている門前空間に大きく二分される。さらにこの構成は、文化3年(1804)の『英彦山由来大略記』を見ると、三所権現在所三峰（北岳、中岳、南岳）を中核に、山麓から銅、石、木の鳥居で結界された、四重の結界聖域に分けられた。四重の結界聖域は、①上宮社殿と経塚遺構のある山頂聖域（常寂光土）、②参籠窟や峰入宿のある山中行場（実報莊嚴土）、③大講堂（奉幣殿）等の社殿伽藍がある英彦山霊仙寺境内域と坊舎群落の門前領域（方便浄土）、④門前大門銅鳥居下に凡聖が雑居する「唐ガ谷地区」の木地師・鍛冶師等が居住していた集落と、「南・北坂本地区」の農民、職人等が居住していた集落（凡聖同居土）として構成されている。このように近世英彦山の神領域形成における最大の特徴は、山頂聖域から俗人の住まう門前町までが四土結界領域にある点、一山山中で全てが完結する霊山という点、血縁組織で形成した一山三千衆徒という比類ない山岳修験集落を築き上げた点にある。これら特徴は現在の山中・門前の姿に遺されており、英彦山の重要な構成要素となっている。

門前主要構造物には座主院跡がある。英彦山霊仙寺境内域から西に1kmほどに延びる大門筋の両側には多くの坊舎群が立ち並び、門前集落が形成されている。また、上霊仙谷下の名勝旧亀石坊庭園がある中谷との分岐に大辻道が交差し、その南側の南谷集落の奥に座主院跡がある。

本町では縄張り図の作成調査と遺物表面採集を実施した。座主院跡は、東西150m、南北100mの敷地範囲を有し、また、番所跡や黒門跡、御下屋跡、座主御本坊跡などの構成が明瞭であり、桃山期～江戸初期の庭園跡も残され、遺構の遺存状態は極めて良好である。周辺域にも座主の近習屋敷跡、南側には座主御廟も配置され、英彦山の中核遺構として重要である。また、おびただしい陶磁器類が採集され、初期伊万里、鍋島などの肥前陶磁器、織部、中国華南陶器など多彩な優品器物が採取されている。

また、本町は座主院跡から300m程南にある智室谷坊集落の地形測量調査も行った。智室谷は、上部に智室窟、最下部に文殊窟が配置され、その間に山伏坊集落が集積している。更に、集落を望む南側尾根鞍部に墓地が並ぶ構成となっている。窟と坊院谷集落の構成は、明確に完結する山中山伏集落であり、英彦山修験集落の典型である。

この外、山中には峰中宿の行者堂備宿、池尾宿、修行窟の五窟、玉屋神社般若窟をはじめとして、墓地、石造物など様々な構成物を調査確認した。しかし、英彦山領域の規模は1,200万㎡にも及び、その確認作業が容易でないことから、史跡構造の詳細な地形データを得るため、昭和61(1986)年作成の航空地形測量図を補足して、航空レーザー地形測量調査を実施した。英彦山主要部の門前から山頂部を中心として、約東西3km、南北2.5km、総面積6.9k㎡の範囲を対象に実施した。そのデータ分析により、『豊前之国郷村高帳』に記された山中600余りの居住建築物と屋敷地が形成されていたことを裏付ける、門前645面以上の坊屋敷や堂社地などの平坦地が確認された。これにより、近世修験集落の構成がほぼ完全に近い形で残っているこ

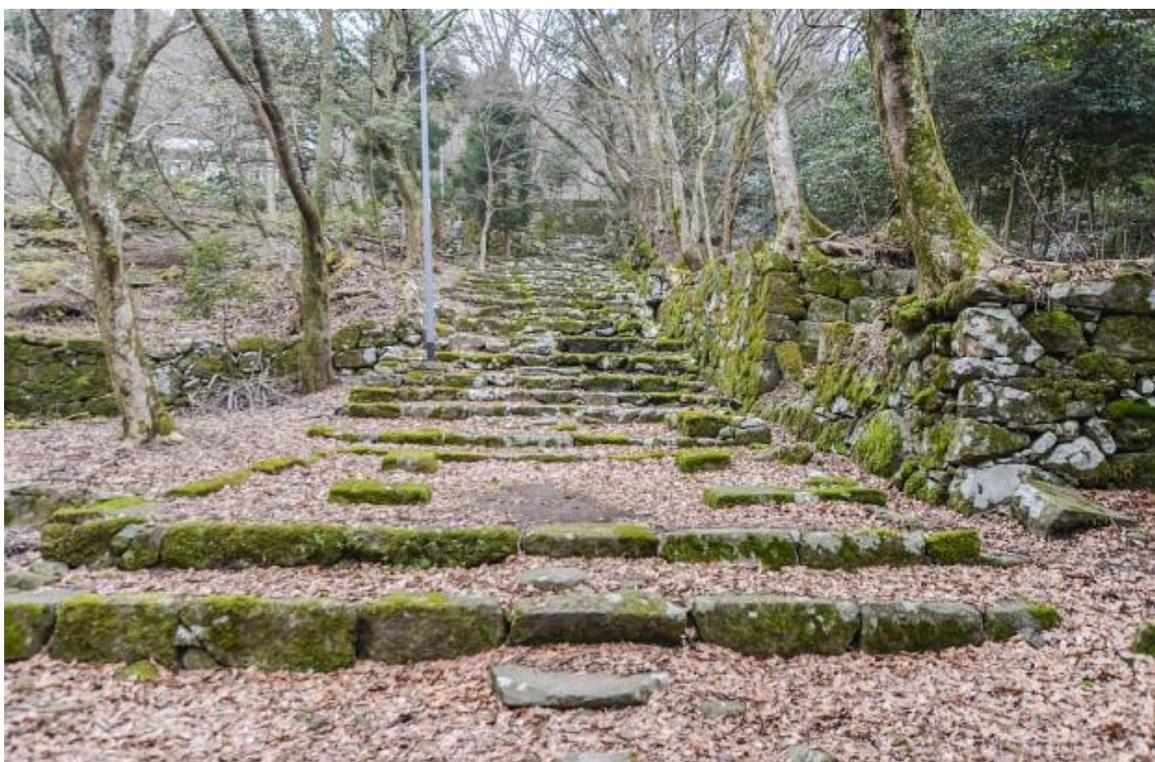
とが判明した。また、『明治初年坊中屋敷図』に記載された250坊余りの坊屋敷地などをレーザー測量図にプロットし、英彦山の歴史空間の特徴と英彦山の領域を捉えた結果、大規模修験集落遺跡「英彦山」の遺跡内容を把握するためのデータをすることができた。

このことから、英彦山の領域観は、『彦山流記』の「彦山七里結界」、『彦山小形』の「彦山十方世界」、そして近世天台教理の「彦山四土結界」へと変遷していることが確認できた。

また、英彦山は古代中世には七里四方領地も戦国争乱や地域権力等に翻弄されてすべて失ったが、近世期に至って豊前小倉藩主細川忠興によって胎蔵界英彦山としての領地が安堵され、三里四方の近世英彦山神領域を確立したことが分かった。しかし英彦山は、幕末までに藩制などの変革から落合、津野、榊田といった境界山域を失い、東西2里(約7.8km)、南北2里半(9.8km)へと神領域が縮小割愛された。さらに明治維新の宗教政策により、英彦山修験道の終焉へと向かっていったことが認知された。

このように修験道によって育まれた深遠な歴史と壮大な領域を有する英彦山は、山上祭祀跡や山中窟、宿遺構などの遺構とともに、現在も生活域として活用される門前大門筋に座主本坊跡をはじめ池泉庭園を配する多くの宿坊群が配置され、良好な状態で史跡の構成物が存在している。また、諸大名が寄進した山頂上宮社殿、奉幣殿、銅鳥居など英彦山信仰への篤信物も顕著に遺されている。

英彦山は、信仰や宗教活動を示す遺跡の変遷が多岐にわたる史料から叙述的、かつ具体的に示されている。特にレーザー測量等により解明された古代から現在までに累積された英彦山の史跡構成は、我が国を代表する山岳宗教遺跡として捉えられ、「神体山として確立した山岳信仰の霊山」であると言える。



図表 36 座主院跡

## (2) 英彦山の歴史

### 1) 古代神体山「英彦山」の信仰

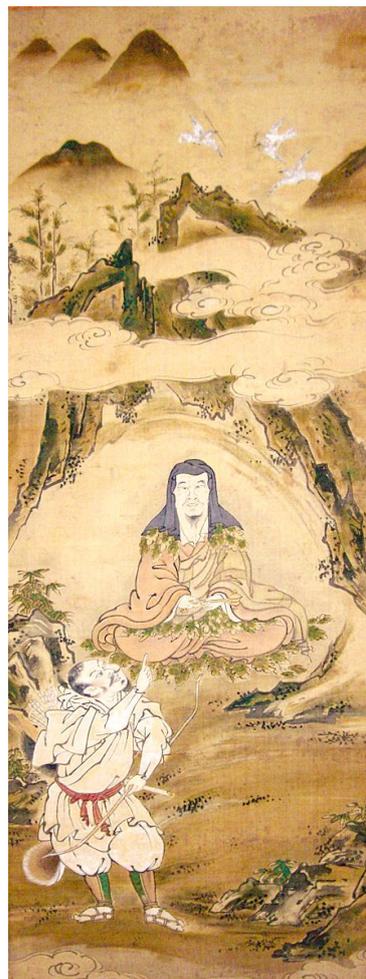
英彦山は古来「日子神」（天忍穗耳命）を祭り、山頂域は神奈備「日子乃御山」として、「日子山」と呼称されていた。

その開基は、『彦山縁起』によると、<sup>けいたい</sup>継体天皇 25（531）年、北魏の僧の<sup>ぜんしやう</sup>善正による修行開基であるとされる。その後、宇佐弥勒寺別当<sup>ぼうれん</sup>法蓮は英彦山の玉屋<sup>くつ</sup>窟で修行し、英彦山を中興した。弘仁 10（819）年、嵯峨天皇の詔<sup>き</sup>勅で「日子山」は、「彦山」に改められたとされている。また『彦山縁起』によると、「四境七里永く寺産として御願寺となし、山に三千の衆をおき、<sup>むら</sup>邑に八百の房をおく」として、英彦山領域と境内領域の概観が示されている。

英彦山の根源的信仰は山上祭祀があり、末法思想に基づく弥勒信仰や密教と相俟って、11～12 世紀頃を中心に、多くの経塚が山頂三峰に営まれた。英彦山では、現在までに 10 口分の銅製経筒が出土している。一箇所から出土した経筒量は非常に多く、このことから求菩提山とともに埋経の聖地となっていたことが窺える。特に昭和 57～59（1982～1984）年の朝日新聞西部本社主催の英彦山学術調査において、法躰岳（北岳）山頂<sup>いむさか</sup>磐境より「王七房（王七郎という説もある）」銘三段積上式経筒、金銅製新羅仏などをはじめとする象徴的な信仰遺物が出土した（現在、重要文化財に指定）。また、英彦山山頂での密教修法を示す遺物として 10～11 世紀頃の黒色土器<sup>たくつきがたつき</sup>托付形杯が出土し、近隣で同様なものは宇佐八幡宮弥勒寺遺跡の 10 世紀後半の土<sup>どこう</sup>壙出土例ほどしか見られない。このことから、黒色土器の六器<sup>あか</sup>に閻伽を盛る密教修法が行われていたと考えられ、宇佐弥勒寺との関連も窺える。



図表 37 英彦山経塚出土経塚（国指定文化財）



図表 38 善正上人と藤原恒雄像



図表 39 法蓮上人

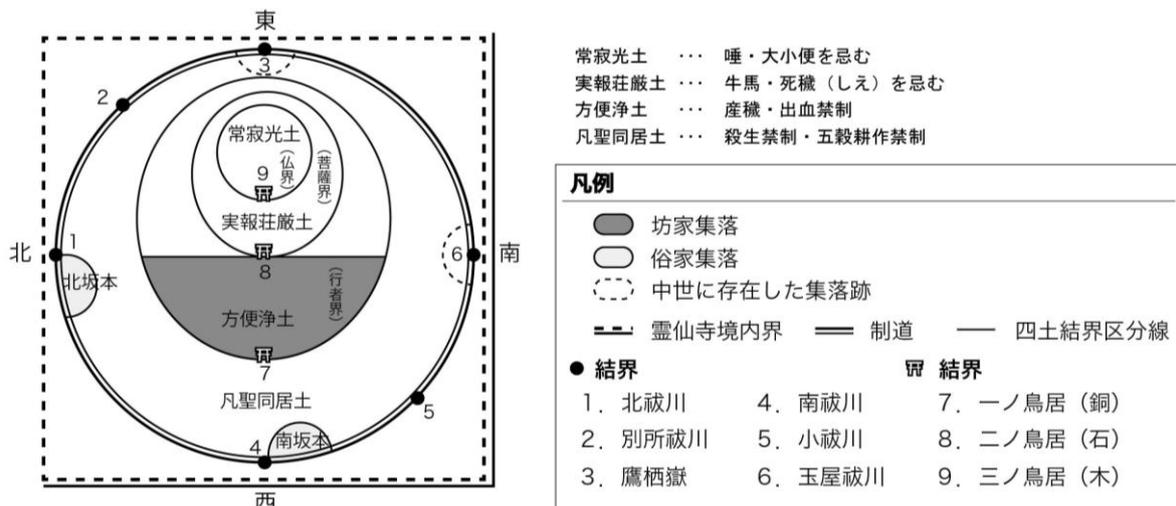
このように古代英彦山は、「山神」信仰の「神体山」として山上聖域が確立し、末法思想の流布とともに弥勒下生を祈念し、山林修行者や宋人らの経塚造営、埋経霊峰の中心となった。また一方で、多くの山林修行者が彦山に留まり、先達、講衆となって禅庵を結んで谷講集落ができた。山中行場として玉屋般若窟に代表される四十九の修行窟が整備され、末山の蔵持山、求菩提山など豊前六峰を包括した七里四方に及ぶ広大な神領域が定められた。宇佐・六郷満山と両極をなす天台系山岳寺院として、また豊前修験道の中核として発展した。その中心的年代は、今熊野窟磨崖仏の嘉禎3(1237)年の年紀銘や採集遺物から11~13世紀頃と考えられている。このことから、『彦山流記』に記された講衆による彦山固有の窟籠修行は、古代・中世英彦山の中心的修行形態であったと推察されている。これら山中窟は、神社(玉屋神社、豊前坊高住神社、宝珠山岩屋神社)などに姿を変えながらも現在まで英彦山信仰の要となっている。

## 2) 中世の彦山

仁平2(1152)年の『<sup>にんもんぼさつちようき</sup>人聞菩薩朝記』に記されている様に、彦山では、日子神と仏が習合した御正体として「彦山権現」が誕生し、上宮、中宮、下宮を中心に十二所権現を配置する諸堂社が建立された。社伝によると、平安時代末、彦山高僧の<sup>ぞうけい</sup>増慶は、彦山権現を讃える「<sup>まつえ</sup>松会」祭礼を整えると、山中講衆は組織化して、院・坊が各谷に配置された。このように彦山では、山中行場、谷集落が完成するとともに、大講堂を本堂とした境内伽藍が整備され、「<sup>ひこさんりようぜんじ</sup>彦山霊仙寺」としての寺格が確立したとみられる。それとともに、独自の神領域支配が展開され、山中惣大行事を中心とした英彦山六峯大行事と豊前・豊後・筑前3国36ヶ村大行事が配置され、山麓七次大行事とともに四十八大行事によって七里四方の神領域が確保された。大行事領域の成立により、山上、<sup>さんげ</sup>山下の領域と信仰体系の確立が見られる。このことを論証する事象として、山麓高木神社(旧大行事社)を中心に「<sup>う</sup>卯の祭」など山下収穫祭が行われており、現在も英彦山信仰が広く浸透していることが記録されている。広大な神領と多くの宗徒を有しながらも、別当寺や山外別院を持たず、山中での一元的惣山支配が展開され、一山一寺として強固な勢力を誇るに至った。

そして江戸期までに、彦山は、三所権現在所三峰(北岳、中岳、南岳)を中核に、山麓から銅、石、木の鳥居を結界として、四重の結界聖域を設け、参道最下部の銅鳥居から下を凡聖雑居界(凡聖同居土)、銅鳥居から大講堂の石鳥居間の1km余りを行者界(方便浄土)、石鳥居から9合目行者堂(1,100m)の木鳥居間は菩薩界(実報莊嚴土)、木鳥居から上部を仏界(常寂光土)という構成が完成した。

前述したように、彦山信仰領域形成における特徴は、山頂聖域から俗人の住まう門前町までが彦山結界領域に取り込まれ、一山山中で全てが完結する霊山という点にある。また、血縁組織で形成した一山三千衆徒という比類ない山岳修験集落を築き上げたことにある。彦山の構成は、比叡山の三塔十六谷の惣寺としての延暦寺と院々谷々の構成を手本に、惣寺としての英彦山霊仙寺と山中十谷と門前南北坂本までを一山とする大規模山岳修験集落が完成した。



図表 40 四土結界と集落配置の概念\*

\*長野覺『英彦山修験道の歴史地理学的研究』を基に作成

英彦山修験道の隆盛は、元弘3・正慶2(1333)年に、後伏見天皇第六皇子長助法親王<sup>ちやうじよ</sup>を座主助有<sup>じよゆう</sup>として、現・朝倉市黒川の「黒川院」に迎え、天台宗門跡との関係を深め、天台修験道としての性格を強めていったことが一因としてある。『高千穂家歴世系次』によると、座主助有以来すべての座主は、天台宗門跡寺院で受戒得度を果たしたことが記されている。このことは、天台修験法流「彦山修験伝法血脈<sup>ひこさんしゅげんでんほうけつみやく</sup>」と真言修験「彦山修験伝法法譜<sup>ひこさんしゅげんでんほうほっぷ</sup>」という血脈、法脈の二元的な組織機能を成立させた。法脈的事象として、野州日光山住客の阿吸房即伝<sup>あきゆうぼうそくでん</sup>が彦山華蔵院正先達承運<sup>しょうせん</sup>から授与され、口伝教義をまとめた『彦山修験秘訣印信口決集<sup>ひこさんしゅげんひけついんしんくけつしゅう</sup>』は全国的に流布し、重要な修験教義となった。

また平安末期の『梁塵秘抄<sup>りやうじんひしやう</sup>』に記された筑紫の靈験所「竈門<sup>かまど</sup>」の本山「彦の山」として、彦山は室町時代には熊野修験の影響下、金剛界竈門山(宝満山)と胎蔵界彦山を往来し、擬死再生の十界行を行う「峰入行」が開始され、峰入宿が設置された。英彦山中には、「池尾宿」「備宿」「籠水宿」などに護摩壇や参籠行宿としての大宿跡、弟子度衆の細工場としての柴宿跡、碑伝板碑などがよく原形をとどめた状態で遺されており、英彦山峰入行を紐解く上での重要遺構となっている。

このように中世彦山の特質は、「彦山黒川院」という対外的座主が確立するとともに、宝満山を金剛界とし、また、英彦山六峰の修験道場を従え、九州修験の統括的靈山として発達したことである。

### 3) 近世の英彦山

近世英彦山の特質は、諸大名の庇護の下、座主家と公家との縁戚強化等により、西国一の修験道場となって「天台修験別山」の地位を得たことにある。

戦国動乱期の周辺領主の覇権争いや豊臣秀吉の九州平定の時代の中で、彦山は殆どの坊社堂宇を失い、更には全ての寺領をも没収された。古代・中世から続いた彦山信仰は、壊滅状態に陥り、歴史的事象の多くもこの時に消滅したと考えられる。転機となったのは、慶長5(1600)年3月5日、豊臣五奉行の増田長盛、長束正家、前田玄以により所領安堵され、彦山への守護不入などを定めた『五ヶ条壁書』が出されたことで、豊前領主の毛利勝信に対して「彦山に於いて、違乱有る間敷き候」とし、彦山への介入が禁じられた。江戸期に至って、小倉藩主の細川忠興をはじめとして各地諸大名を外護の大檀那とし、多大な寄進を受けて一気に再興した。

元和2(1616)年、細川忠興により大講堂が再建され、寛永14(1637)年、佐賀藩主の鍋島勝茂<sup>なべしまかつしげ</sup>により銅鳥居が建立されたことは、再興の象徴であった。天保13(1842)年には、中岳山頂において鍋島斉正<sup>なべしまなりまさ</sup>により上宮御本殿が寄進された。

その信仰圏は九州一円におよび、彦山は「九州九国総鎮守」として、大峰山や羽黒山と並ぶ三大修験霊場となった。この一つの要因は、細川忠興が彦山座主跡目之儀に関して、日野大納言<sup>ひのだいなごん</sup>輝賢<sup>てるすけ</sup>の二男である玄賀<sup>げんが</sup>を14代座主舜有<sup>しゅんゆう</sup>の孫娘である深有尼<sup>じんゆうに</sup>(昌千代<sup>まさちよ</sup>)と結ばせ、忠有<sup>ちゆうゆう</sup>として15代座主に着座させたことにある。また、次代の有清<sup>ゆうしん</sup>も岩倉(久我)家から入御し、公家、天台宗門跡との関連を強めていった。有清の子の通福が愛宕家<sup>みちとみ おたぎ</sup>を再興し、後光明天皇侍従となると、その子の福子は霊元天皇の掌侍として、仁和寺御室寛隆法親王の生母となった。このような脈で霊元法皇が享保14(1729)年、英の冠字を付して「英彦山」勅額を下賜した。また座主有清は、聖護院門跡道晃法親王の生母三位御局と又従兄弟であった。そのような中、聖護院門跡と本末論争が起こるが、20代座主の相有<sup>そうゆう</sup>は日光山門跡を通じ、寺社奉行に訴えた。これにより英彦山は「別山紛れなし」の裁許を得た。このことは天台宗門跡や公家との強い繋がりの上<sup>うへ</sup>に為し得たものと考えられる。

この様に近世英彦山は、大名筋、公家と関連して隆盛し、山中に衆徒三千にも及ぶ大規模修験集落が完成した。また「坊家」は、九州一円に42万戸もの檀家を有し、坊山伏は「歩き」と称して檀家を廻って布教し、檀越筋からは代参者を立てて「松会」参詣する「彦講」、「権現講」が行われた。彦講は佐賀県神埼地域などで現在も行われている。また、『豊前国郷村高帳』には、坊中500軒、庵室80軒、市中25軒という山中600余りの居住建築物と屋敷地が形成されたことが記されている。平成24(2012)年の航空レーザー測量の分析において、門前645面以上の宿坊などの平坦地を確認し、28棟におよぶ歴史的建造物の調査から大規模修験集落「英彦山」の特徴と規模を明確にすることができた。

#### 4) 近代以降の英彦山

明治元(1868)年の「神仏分離令」により、英彦山修験道は衰退した。英彦山霊仙寺は、英彦山神社(現、英彦山神宮)となり、座主家は「高千穂」を名乗り、英彦山神宮宮司家として今日まで世襲されている。明治初年坊中屋敷図や旧職交名録などから推察すると、最終的には250坊程の宿坊が残ったことが窺える。しかし、多くの山伏は離山し、近代化による筑豊の炭鉱景気とともに、坊家は旅館業等に転職し、英彦山は保養の場所として変貌した。

昭和2(1927)年、昭和の新時代を代表する勝景を新しい好尚により選定することを目的に、大阪毎日新聞社・東京日日新聞社の主催、鉄道省の後援により、英彦山は「日本百選」に選定された。また、明治40(1907)年に英彦山神宮奉幣殿、大正13(1924)年に鬼スギ、昭和3(1928)年に旧亀石坊庭園、昭和14(1939)年に英彦山神宮銅鳥居\*、昭和16(1941)年に鷹巣山が国指定文化財に指定され、昭和25(1950)年には、佐渡・弥彦、琵琶湖とともに耶馬日田英彦山国定公園として国内で最初の国定公園に選定された。これとともに英彦山の観光地化が進み、平成16(2004)年に参道脇に英彦山スロープカー、英彦山花園などが整備されている。

神仏分離令による修験道の衰退が進む一方、修験道の中で最も秘儀とされた峰入りは綿々と受け継がれていることがわかっている。『英彦山神社日誌』によると、多聞坊により私的に伝承されていたことが分かる。その後、断続的に継承され、明治43(1910)年8月には、大々的

に秋峰入りが行われたと伝わり、その時の行場を結界する「股木」が残されている。峰入りは、平成6（1994）年より継続的に修験春風会により執り行われており、平成25（2013）年5月、150年ぶりに宝満山修験会により英彦山への峰入りが果たされている。

全体としては、英彦山は信仰の山から観光の山へと変貌を遂げた。山頂が自然公園の特別保護区域として最も重要度の高い保護区に指定されたにより、図らずも自然護持とそこにある歴史的文化遺産が護られる形となった。

図表 41 英彦山の主な変遷 (1/3)

【参考：九州歴史資料館平成 29 年度特別展 霊峰英彦山】

年	内容	出典
継体天皇 25 (531) 年	北魏の僧、善正上人が彦山を開山したという	鎮西彦山縁起
大宝元 (701) 年	役小角が彦山に登ったという	鎮西彦山縁起
慶雲 2 (705) 年	役小角が彦山の峰を開き、山伏修験道を伝えたという	歴代鎮西要略
弘仁 10 (819) 年	詔により、日子を彦と改め、霊山を霊仙寺と号す	鎮西彦山縁起
嘉保元 (1094) 年	彦山の衆徒が訴訟を起こして、争乱となり、大宰大貳藤原長房が都へ逃げ帰る	中右記、本朝世紀
永久元 (1113) 年	鞍手郡日光山住僧嚴与が南岳経塚に大仏頂経一卷を写経理納	英彦山南岳山頂出土、銅製円筒形銘文
久安元 (1145) 年	上宮宝殿に銅板経が奉納されたという	彦山流記
永暦元 (1160) 年頃	彦山を京都新熊野神社の荘園に施入する	新熊野神社文書、平安遺文
平安時代末期	後白河法皇撰の『梁塵秘抄』に、筑紫の霊験所として「彦の山」とある	梁塵秘抄
鎌倉時代初期	大友能直が彦山三所権現御正体を奉納	彦山三所権現御正体銘文
建保元 (1213) 年	7月8日、『彦山流記』が成立するという	彦山流記
嘉禎 3 (1237) 年	今熊野磨崖仏が製作される	今熊野磨崖仏銘文
正慶 2 (1333) 年	後伏見天皇の第六皇子助有(長助)法親王が三井寺円満院より九州へ下向。筑前国黒川庄(現・朝倉市)に居住し、彦山座主となる	高千穂家歴世系次(高千穂(上)家文書)
文安 2 (1445) 年	『彦山諸神役次第』が成立する	彦山諸神役次第(英彦山神宮文書)
天正 4 (1576) 年	大友軍彦山を攻めるといふ	豊筑乱記、両豊記、九州記
天正 9 (1581) 年	大友軍が襲来、伽藍焼失、座主舜有が黒川院を去り、彦山南谷華蔵院に入る	高千穂家歴世系次
文禄 3 (1594) 年	南北朝時代製作されたという梵鐘が霊仙寺に寄進される	梵鐘銘文
慶長 6 (1601) 年	黒田長政、銅造彦山三所神体を造像させる	増了坊文書
元和 2 (1616) 年	9月吉日、小倉藩主細川忠興が大講堂(奉幣殿)を再建する	大講堂建立棟札銘
寛永元 (1624) 年	6月12日、佐賀藩主鍋島勝茂が上宮拝殿を造営	棟札銘写
寛永 14 (1637) 年	8月吉日、佐賀藩主鍋島勝茂が銅の鳥居を寄進する	銅鳥居刻銘
元禄 9 (1696) 年	3月27日、京都聖護院との本末論争で、寺社奉行の裁許により、「別山無紛」となる	本紀伊・戸能登・永伊賀連署裁許書(高千穂(上)家文書)
享保 14 (1729) 年	霊元法皇の院宣により「英彦山」となる	霊元法皇院宣(英彦山神宮文書)
寛政 4 (1792) 年	松浦史料博物館の『英彦山大権現松会之図』が製作される	平戸藩宗歳堂蔵書目録
天保 13 (1842) 年	佐賀藩主鍋島斉正が、中岳山頂の御本社(上宮)を建立する	増了坊文書
文久 3 (1863) 年	小倉藩兵が来襲し、座主を含む幹部山伏を小倉に連行し、武力制圧の状況下に置かれる	日子山義僧伝
慶応 4 (1868) 年	閏4月10日、香春寺社方から神仏分離に関する書状・布告等が英彦山に届く	高千穂家当番日誌
慶応 4 (1868) 年	9月19日、教有、英彦山神社大宮司に任官	高千穂家歴世系次
明治 2 (1869) 年	2月4日、教有へ高千穂姓の宣下あり	高千穂家歴世系次
明治 5 (1872) 年	9月15日、修験宗廃止の布告が出される	法令全書
明治 21 (1888) 年	高千穂宣磨、英彦山神社保存会の設立を県に申請し、認可される	英彦山神社保存会設置願
明治 33 (1900) 年	高千穂昆虫学実験所を創設	鶯嶺仙話
明治 35 (1902) 年	高千穂昆虫学実験所を九州昆虫学研究所と改称	鶯嶺仙話

図表 41 英彦山の主な変遷 (2/3)

【参考：九州歴史資料館平成 29 年度特別展 霊峰英彦山】

年	内容	出典
明治 40 (1907) 年	5 月 27 日、「英彦山神社奉幣殿」が古社寺保存法に基づく特別保護建造物（後の国指定文化財（建造物））に指定される	
大正 13 (1924) 年	12 月 9 日、「英彦山の鬼スギ」が史蹟名勝天然記念物保存法に基づく天然記念物に指定される	
昭和 3 (1928) 年	2 月 7 日、「旧亀石坊庭園」が史蹟名勝天然記念物法に基づく名勝に指定される	
昭和 8 (1933) 年	吉田初三郎が『英彦山霊山図』を製作する	
昭和 9 (1934) 年	英彦山神社の奉幣殿の解体修理	
昭和 11 (1936) 年	10 月 20 日、旧座主院跡に九州帝国大学附属彦山生物学研究所が開設	福岡日日新聞
昭和 14 (1939) 年	10 月 25 日、「英彦山神社銅鳥居」が国宝保存法に基づく国宝（後の国指定文化財（建造物））に指定される	
昭和 16 (1941) 年	8 月 1 日、「鷹巣山」が史蹟名勝天然記念物保存法に基づく天然記念物に指定される	
昭和 25 (1950) 年	英彦山が「耶馬日田英彦山国定公園」に指定される	
昭和 34 (1959) 年	6 月 27 日、「修験板笈」が国指定文化財（工芸品）に指定される	
昭和 39 (1964) 年	5 月 7 日、「英彦山のトキノキ」、「英彦山のボダイジュ」が福岡県指定文化財（天然記念物）に指定される	
昭和 41 (1966) 年	10 月 1 日、「梵鐘 文禄三年追銘」が福岡県指定文化財（工芸品）に指定される 11 月 15 日、「板倉」が福岡県指定文化財（建造物）に指定される	
昭和 50 (1975) 年	「英彦山神社」から「英彦山神宮」となる	
昭和 52 (1977) 年	4 月 9 日、英彦山修験信仰の遺品などが「英彦山資料」として福岡県指定文化財（有形民俗文化財）に指定される	
昭和 53 (1978) 年	3 月 25 日、英彦山神宮や坊舎に残る英彦山修験道関係の記録が「英彦山修験道関係文書」「高田家所蔵英彦山修験道文書」として福岡県指定文化財（有形民俗文化財）に指定される	
昭和 57 (1982) 年	南岳経塚の発掘調査が行われる 北岳の経塚で金剛仏と銅製蓋は発見される	
昭和 58 (1983) 年	智室窟の発掘調査が行われる	
昭和 59 (1984) 年	北岳経塚の発掘調査が行われる	
昭和 63 (1988) 年	6 月 6 日、南岳出土の銅経筒などが「福岡県英彦山経塚出土品」として国指定文化財（考古資料）に指定される	
平成 2 (1990) 年	6 月 29 日、「仁王般若経〈上下〉（色紙金銀箔散）」が国指定文化財（有形文化財）に指定される	
平成 3 (1991) 年	11 月 15 日、楞嚴坊に伝わる資料が「英彦山楞嚴坊修験資料」として福岡県指定文化財（有形民俗文化財）に指定される	
平成 5 (1993) 年	6 月 10 日、「彦山三所権現御正体」が国指定文化財（工芸品）に指定される	
平成 10 (1998) 年	3 月 20 日、「英彦山大河辺山伏墓地」が添田町指定文化財（史跡）に指定される	
平成 16 (2004) 年	参道脇に英彦山スロープカー、英彦山花園等が整備される	
平成 18 (2006) 年	英彦山神宮奉幣殿の災害復旧工事	
平成 22～27 (2010～2015) 年	英彦山内の遺跡内容確認調査が行われる	

図表 41 英彦山の主な変遷 (3/3)

【参考：九州歴史資料館平成 29 年度特別展 霊峰英彦山】

年	内容	出典
平成 23 (2011) 年	3 月 18 日、「英彦山顕揚坊庭園」が福岡県指定文化財（名勝）に指定される	
平成 29 (2017) 年	2 月 9 日、「英彦山」が国指定文化財（史跡）に指定される	

### (3) 英彦山に関連する指定文化財

本町は、国指定文化財と県指定文化財、町指定文化財を合計すると 32 件の指定文化財を有しており、史跡英彦山内に関連する指定文化財は下表の 20 件である。

英彦山で発掘された出土品等は、修験道館において広く公開されている。

図表 42 英彦山の指定文化財

種別		指定年月日	名称	所在地	説明等	
有形文化財	工芸品	国指定	昭和 34 年 6 月 27 日	修験板笈	修験道館	元亀 3 (1572) 年奉納品
			平成 5 年 6 月 10 日	彦山三所権現御正体	修験道館	径 45cm 銘文「彦山下宮御正体勸進大千房」大友能直寄進
		県指定	昭和 41 年 10 月 1 日	梵鐘 文禄三年追銘	英彦山	文禄 3(1594) 年全高 94cm、毛利氏寄進
	書跡・書籍	国指定	平成 2 年 6 月 29 日	仁王般若経〈上下〉 (色紙金銀箔散)	修験道館	上下 2 巻、荘厳経(色紙経)
	考古資料	国指定	昭和 63 年 6 月 6 日	福岡県英彦山経塚出土品	修験道館	永久元年銘経筒 1 口、銅経筒 5 口分(南岳出土)、銅経筒 2 口、銅如来立像
	建造物	国指定	明治 40 年 5 月 27 日	英彦山神社奉幣殿	英彦山	元和 2 (1616) 年細川忠興再建、附棟札 14 枚
			昭和 14 年 10 月 25 日	英彦山神社銅鳥居	英彦山	寛永 14 (1637) 年鍋島勝茂建立
県指定		昭和 41 年 11 月 15 日	板倉	英彦山	江戸時代、元座主院の文庫	
民俗文化財	有形	県指定	昭和 52 年 4 月 9 日	英彦山資料	修験道館	英彦山修験信仰の遺品、財蔵坊を含む
			昭和 53 年 3 月 25 日	英彦山修験道関係文書	修験道館	鎌倉時代～江戸時代、英彦山神宮や坊舎に残る英彦山修験道関係文書・記録等
			昭和 53 年 3 月 25 日	高田家所蔵英彦山修験道文書	修験道館	廃絶した坊舎の文書・記録類を収集保存したもの
			平成 3 年 11 月 15 日	英彦山楞嚴坊修験資料	英彦山	英彦山坊家に伝わる江戸時代の修験道資料及び坊舎
	無形	町指定	平成 2 年 3 月 31 日	彦山踊り	英彦山	彦山踊り保存会
記念物	史跡	町指定	平成 10 年 3 月 20 日	英彦山大河辺山伏墓地	英彦山	江戸時代中期、総数 50 基の山伏墓地
	名勝	国指定	昭和 3 年 2 月 7 日	旧亀石坊庭園	英彦山	広さ 699 平方メートル、坊舎の庭園
		県指定	平成 23 年 3 月 18 日	英彦山顕揚坊庭園	英彦山	江戸時代前期、座観式庭園
	天然記念物	国指定	大正 13 年 12 月 9 日	英彦山の鬼スギ	英彦山	樹高 38m、胸高周囲 12.4m
		県指定	昭和 32 年 8 月 13 日	英彦山のぶっぼうそう	英彦山	11 羽確認(昭和 32 (1957) 年)
			昭和 39 年 5 月 7 日	英彦山のトチノキ	英彦山	樹高 24m、胸高周囲 4.5m
			昭和 39 年 5 月 7 日	英彦山のボダイジュ	英彦山	樹高 17m、胸高周囲 1.5m

(平成 31 (2019) 年 3 月 31 日現在)

ここでは英彦山内にある国指定文化財の概要を記す。

工芸品は、数少ない彦山権現の信仰資料として貴重である「彦山三所権現御正体」と、修験者が使用していた板笈で、室町時代の元亀3（1572）年に製作されたとされる「修験板笈」がある。

考古資料は、末法思想による仏法の消滅をおそれ、弥勒再生にそなえるために埋められ、英彦山南岳山頂で発見された「福岡県英彦山経塚出土品」がある。

書跡・典籍は、護国三部経の一つで、他に類例がなく、貴重な遺品である「仁王般若経〈上下〉（色紙金銀箔散）」がある。

建造物は、「英彦山神社奉幣殿」と「英彦山神社銅鳥居」がある。

「英彦山神社奉幣殿」は、小倉藩主細川忠興によって元和2（1616）年に建立されたもので、英彦山神宮最大の木造建造物である。元々は、英彦山霊仙寺の大講堂として建立されたものが、神仏分離により奉幣殿へ改称されたもので、現在も内陣と外陣に区分される等の寺院の講堂としての機能が残されている。明治10（1877）年に屋根替を行った後、明治40（1907）年に国宝指定、昭和5（1930）年に台風罹災を受けて昭和7～9年（1932～34）に解体修理を行った。文化財保護法制定後の昭和29（1954）年に棟札14枚とともに重要文化財に追録されている。

「英彦山神社銅鳥居」は、佐賀藩主鍋島勝茂が寛永14（1637）年に建立したもので、肥前国の鋳物師によって造られた鋳銅製の鳥居である。柱間約6m、地面下より貫下まで約4.5mで、参道門前を領域とする英彦山神宮大門入口に位置している。

名勝は、英彦山修験道坊家の代表的な庭園である「旧亀石坊庭園」があり、雪舟の作庭と伝わる。

天然記念物は、樹齢1,200年、樹高38mで森の巨人たち100選にも選ばれた「英彦山の鬼スギ」がある他、山頂部が平坦でその周囲が垂直の岩壁をなす特徴的な地形の「鷹巢山」がある。



図表 43 修験板笈



図表 44 彦山三所権現御正体



図表 45 旧亀石坊庭園



図表 46 鷹巢山

#### (4) 英彦山の空間構造と構成単位

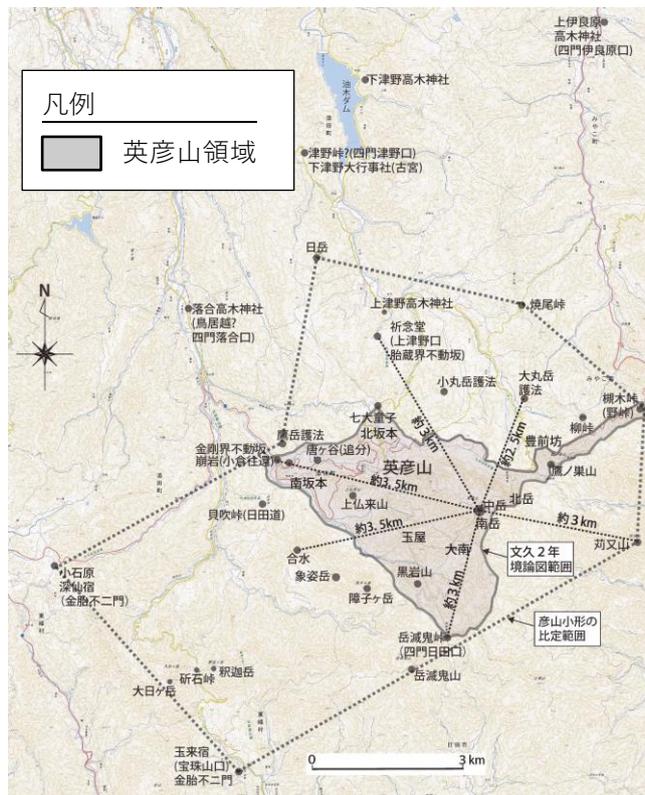
##### 1) 英彦山領域と形成過程、構成

###### ①英彦山領域

英彦山の領域は、英彦山霊仙寺大講堂の再建余材で作成されたとされる立体地形模型の『彦山小形』や『文久二年英彦山社地落合村境論絵図』等において、その範囲が示されている。

江戸初期に所領を安堵され、小倉藩などの大名筋から知行寄進を受けて成立した英彦山領域の範囲は、「彦山小形」に示す範囲とされている。

英彦山は、小倉藩の藩政改革の中、増益のための新田開発、農村支配が進み、天保2(1831)年には山林検地をして山奉行の監理が強化された。その結果、神領支配が逼迫され、最終的に文久2(1862)年の『文久二年英彦山社地落合村境論絵図』の領域になったとされる。この範囲は、現在の大字英彦山の範囲とほぼ符号するもので、今日まで受け継がれてきた英彦山の領域を示している。この範囲は、1,177.2haに及び、国内最大級の規模として捉えられている。



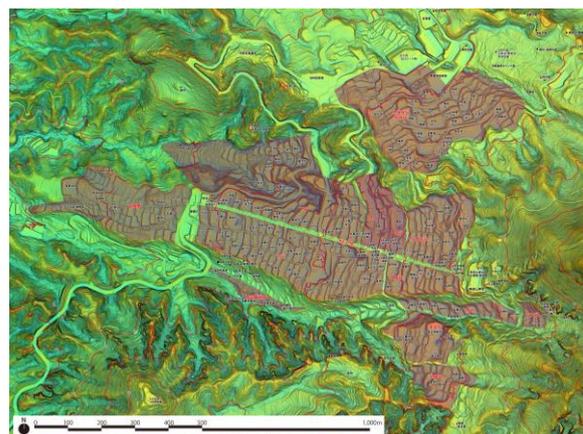
図表 47 英彦山領域範囲

【出典：英彦山総合調査報告書】

###### ②集落の形成過程と構成

彦山集落は、『彦山流記』に見られるように、鎌倉初期までに門前上部の四谷(北谷(惣持院)谷、上霊仙谷、南谷、中谷)が形成された。その後、彦山には諸堂や院が配置され、彦山集落は、山中や門前谷集落において、室町時代以後十谷に拡大し始めたと考えられている。

門前集落配置構成は、戦国動乱により破却され、近世に至ってそれを覆うように、新たな構成により集落が形成されている。大門筋を中心として、その両側に堅牢な石垣を構築し、多くの平坦面を造成されたことが示されている。諸堂宇跡や坊院屋敷地と思われる平坦面は、英彦山坊院が置かれた谷集落におけるレーザー測量による陰影図等のデータから、全体で645面以上が確認された。そのうち、『明治初年坊中屋敷図』で確認できる約250坊を重ね合わせ、現在もその殆どの平坦面が存在していることが明らかにされた。



図表 48 英彦山全体レーザー測量図

【出典：英彦山総合調査報告書】